

学校名	熊本県立東稜高等学校

活動のテーマ	生徒自らが行う防災教育の永続的システム作り
主な教科領域等	教科領域（国語、数学、英語、地歴公民、理科、体育、家庭、情報、特別活動）
活動に参加した児童生徒数	全学年約1080人
活動に携わった教員数	85人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	55人 【保護者・地域住民・その他（関係機関）】
実践期間	平成29年4月1日 ～ 平成30年3月31日
想定した災害	※該当するものに丸をつけてください。複数可。 地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他（ミサイル発射対応）

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

14年後には、熊本地震後に生まれた震災を知らない生徒が入学してくる。また県内でも被災状況の濃淡に伴い防災意識にも温度差が大きい。さらに「熊本の次はまた熊本」の可能性も高く、防災教育は喫緊の課題である。また本校生は全国に進学していくため「東稜高校は内陸部に有り津波は関係ない」という意識ではなく、総合的な防災リテラシーを身につけさせる必要がある。

一方学校は、震災の為1ヶ月間授業の中断を余儀なくされ、学力保障のための授業時数の確保、生徒の心のケアのための担任の時間確保が最優先されるべき状況にある。また学校には、性教育、キャリア教育、主権者教育など〇〇教育と名のつくものが数多くあり、授業時数確保に苦慮している。以上の実態を踏まえて、活動のテーマを上記のとおり設定し、防災教育をブームや一過性のものにさせないために、日常の教育活動に溶かし込むことを活動の目的とした。新しいことに極力手を広げず、今あるものを防災の視点から見直し、生徒に出来る事は生徒にさせながら、自主性、責任感、行動力の育成を図り、担任負担を減らし、授業時数削減をしない、どの学校でも、誰が担当者でもできる持続可能なシステムとプログラムの開発をねらいとした。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール

実践は、学校防災教育年間計画に従って行った。（別添資料1）教科内容を防災の視点から見直し各教科の授業の中で行うものと特別活動の時間を使って行う防災教育（I）～（IV）（別添資料2）と防災をテーマにした小論文コンクール（別添資料3）、防災グッズアイデアコンテスト（別添資料4）、P1チャレンジ（別添資料5）など行事として行うものの3分野から構成した。

3) 9月研修会の学びの中から自校の実践に活かしたこと。研修会を受けての自校の活動の変更・改善点。

昨年度まで（助成金を受ける前）の実践と今年度の実践で変わった点。助成金の活用で可能になったこと。

研修会の学びの中から実践に生かしたことは、次の3点である。階上小学校、中学校の訪問の中で最先端の防災教育を見せていただき、児童・生徒は高い防災リテラシーを身に付けていることを実感した。熊本でも今後小中学校で、高い防災リテラシーを身に付けた生徒が入学してくることが予想される。高校としてそれらをさらに深めるようなプログラムの開発を心掛けた。また研修全体をとおして、人と人との繋がりが人の心と体を救うことを学ばせて頂きハード面とソフト面のバランスを心掛けた。例年、校内での避難訓練が主な実践であったが、本年は訓練に加えて教育の実践も導入した。学校一斉指導を変更し、3か年計画で原則学年毎のプログラムとした。また助成金の活用で、Face to face の他校を訪問しての交流が可能となり、防災教育の核となる生徒防災委員の育成が出来た。（別添資料6）

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

防災教育・防災管理に関して、昨年度の1事業から本年度21事業に事業数を大幅に増やしたが、短縮授業1日と3時間のLHRとでほとんどの事業の企画、運営を担当者と生徒防災委員で行うことが出来た。学校評価アンケートの結果の分析（別添資料7）の防災教育に対する満足度の問いでは、生徒は、よくあてはまる56%、当てはまる40%で、ネガティブな回答である当てはまらない、全く当てはまらないを合わせても4%であるのに対して、職員は「防災教育に積極的に取り組んだ」では、よく当て

はまる28%、当てはまる54%で、ネガティブな回答が18%と、生徒の4倍強となった。活動量は満足度を高めるための重要なファクターであるから、保護者の回答結果が、生徒と職員の間の結果であったことと合わせて考えると、本年度の防災教育は、少なくとも、生徒主体の活動が多い実践であったといえる。防災教育と授業時数の確保・生徒主体の活動が両立できて、防災教育の日常化と継続に寄与できるプログラムに近づいたと思われる。しかし地域防災の要である職員の防災意識と防災リテラシーの向上が今後の課題ともいえる。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び(変容)があり、どのような力(資質・能力・態度)を身につけたか。

専門家による講義と実習により基本的な防災リテラシーが獲得された。また地域住民、関係機関、保護者、学校運営協議会委員の協力を得て行った避難訓練・防災訓練の各学年のアンケート結果を分析すると(別添資料8、9、10)、全学年で「防災について家庭でも話題にしたい」「何らかの備えを考えたい」と大多数が答えており防災教育の成果が家庭にも波及したと言える。2年生では、「防災通信を公民館に貼りたい」などのアイデアが寄せられ、約25%の生徒が「今回の避難所開設支援訓練で学んだことなどを活かして、地域のボランティアに取り組みたい」と回答している。地域を巻き込んだ避難訓練、防災訓練のFace to faceのコミュニケーションが、地域と生徒の距離を縮めた。また知識や技能を身に付けたことがボランティアへのハードルを下げた。今後学校としてボランティアを推進していかなければならない。逆に言えば我々がそのような機会を与えてこなかった。反省点である。学校評価アンケート(別添資料8)のボランティアに対する満足度に関する問いの回答から、「ボランティアを積極的に行っている」という問いに、よく当てはまる、当てはまると回答している生徒が、31%にとどまっているのに対して、職員は「ボランティアを積極的に推進している」の問いにポジティブな回答が、74%で2倍強となっており、生徒と職員の意識のずれが大きい事がわかる。これは教職員の認識の甘さに起因している部分も大きいと考えられ、職員の意識改革のための社会性、社交性の養成やボランティアをコーディネート出来る教員の育成が課題として浮上した。すなわちボランティア推進は、生徒の問題でなく指導者側の問題である。この問題点が洗い出せたことも大きな成果であった。労働力提供型でなく課題解決型のボランティアの推進を目指す。

また、小論文コンクールでは、防災意識を検証することで日常生活の意識を検証することも出来た。非日常を考えることで日常生活が改善される、防災教育の他の教育活動への波及効果が確認された。特に3年生では、この傾向が強かった。防災グッズアイデアコンテストでは、日常を防災の視点から考えるきっかけを与えた。この取組から将来商品化出来るものが生まれ、その収入で防災教育の活動資金が得られれば幸いである。防災通信は、家庭の防災意識の高揚に繋がった。P1チャレンジも、意識向上の有力な手段となり得ることが確認できた。

葛藤事例を用いた思考実験型討論授業では、解なき葛藤状態の中で、様々な価値観、道徳観をぶつけ合いながら議論を重ねたことで、思考力、判断力、表現力の育成や多様性の許容力を高める効果があった。

③教師や保護者、地域、関係機関等(児童生徒以外)の視点から

本年度から熊本県は、全ての県立学校を防災型コミュニティースクールに指定して、学校運営協議会を設置して(別紙資料11)、新設の防災主任を中心に地域と連携した防災管理に取り組んでいる。東稜高校のある山ノ内地区はベッドタウンである。人口約9700人、うち高齢者2000名、うち要介護者400名、昼間の発災の場合、現役世代のほとんどは町外に働きに出ており、東稜高校約1200人は貴重なマンパワーである。地域連携の中でこの事実や地域の東稜高校に対する期待が分かったことは成果の一つであった。また逆に東稜高校を地域に知って頂いたことや地域や行政の声を防災マニュアルなど防災管理に生かしたことは意義深く、「防災行政に関する高校生の意見を頂きたい」という声も上がり、取組に双方向性が出てきた。人と人との繋がりが出来たことが最大の成果である。保護者からも期待以上の満足度を得た。(別添資料8)

5) 自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

生徒自らが防災教育を行うために、核となる人材育成を行ったことが工夫した点である。具体的には、生徒会の中に、生徒防災委員会を新たに設置して生徒防災委員を中心に様々な活動を行った。クロスロードゲームやHUG研修は、生徒防災委員が中心となって授業を進めた。また防災通信の発行(別添資料12)、京都府立東稜高校、宮城県多賀城高校、大阪府立三国丘高校との生徒交流、NPO団体の主催するHABATAKI 東北×熊本～復興の輪プロジェクト～への参加や兵庫県「人と未来防災センター」での研修をとおして、生徒防災委員が自ら知見を広め、それを生徒や家庭に対して、防災通信や防災教育、文化祭などあらゆる機会を利用して、広めることが出来た。また地域の祭りにも参加し、防災に関するブースを開き、得られた知見を地域にも発信した。理数コース、国際コースも特色を活かした取組が出来た。

6) 実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

人と人との繋がりを作ることが防災教育では大切であるということが実践から得られた教訓である。多くの外部の方々の献身的なご協力に助けられた。感謝の一年であった。

課題については、小中学校で身につけた防災リテラシーを深化させるプログラムの開発である。小論文コンクールでも、防災意識の高まりなど一定の効果が得られたが、日本人がなぜ共助に強いのか、絆や無常観など日本人の心の原点に迫る深い考察が出来る洞察力や思考力の養成がさらに求められる。また段ボールベッド作成実習においては、ベッド周りの仕切り壁をどの位の高さにするのが適当であるか、プライバシー保護と避難所の安全管理の観点から考えさせるなど、訓練に教育の要素を取り入れる視点を持って、思考力、判断力、表現力を養成できるように、個々のプログラムの改善が求められる。進学校であるからには、学力向上に寄与できる防災教育プログラムを目指したい。またプログラムによっては、広範囲から生徒が通学してくるという高校ならではの事情から工夫すべき点や限界も見えてきた。活動資金の確保や防災管理と防災教育の担当者を分けて互いの質を高めるなどの課題がある

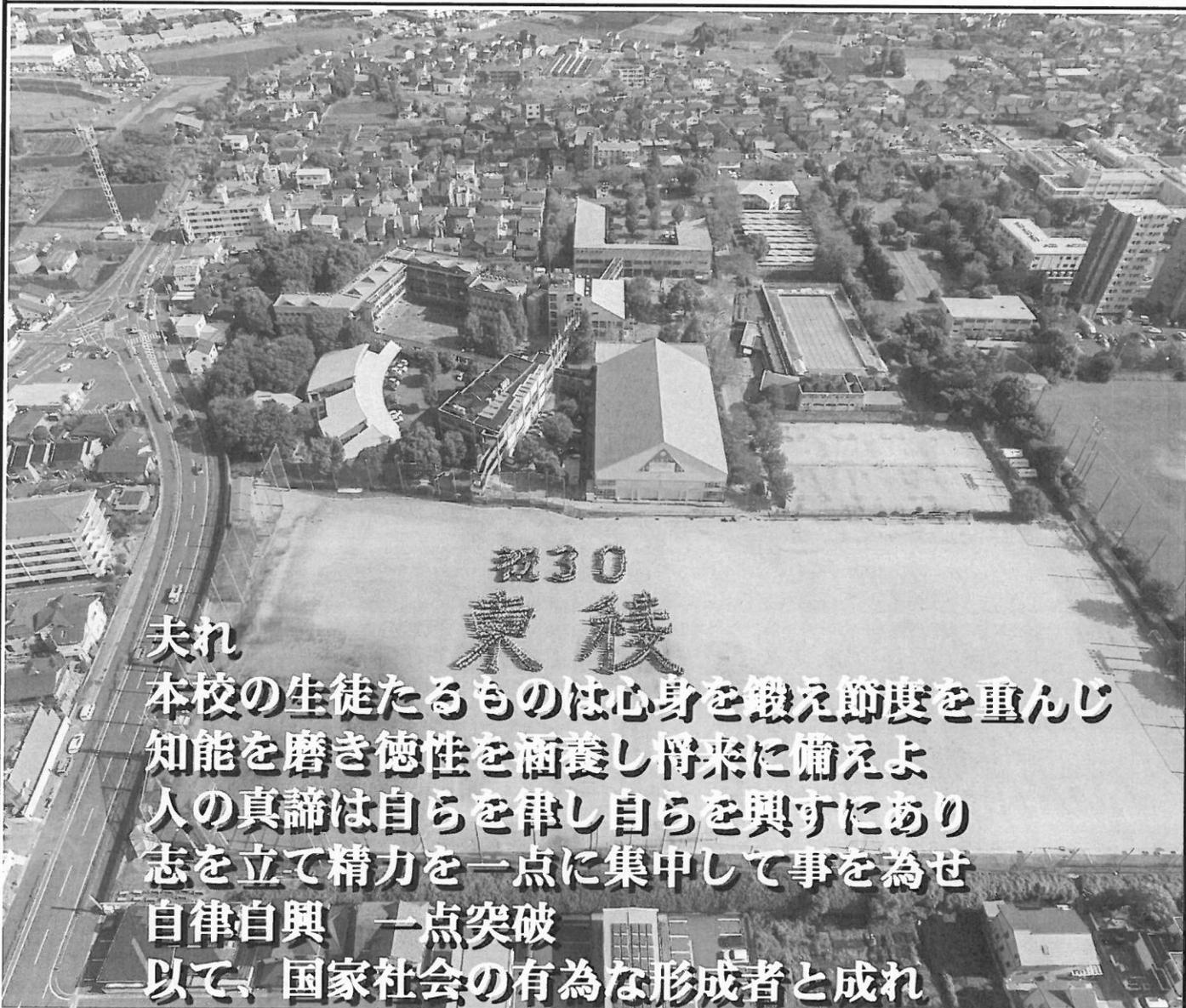
7) その他

防災教育は命の教育である。だから理想論ではなく現実論で考えなければならない。ましてやきれいな事は通用しない。生徒も否応なしに、命や現実と向き合い、また自分と向き合うことになる。このことが生徒を成長させ大人にした。また防災教育は人と人との繋がりを作る。さらに防災教育が進路選択の切っ掛けとなり、進学に結びついた生徒が出たことは、進学校における防災教育実践の成果として小さくない。今後も防災教育の可能性を探っていきたい。

今年度の実践活動は、教員研修で得られた知見がベースとなっている。このような示唆に富む、貴重な学びの機会を与えて頂いたユネスコ協会様やアクサ生命様をはじめ、多くの方々に心より感謝申し上げます。今年度得られた全国の学校・関係機関との良いご縁を大切にして、防災教育を持続発展させたい。

東稜高校防災通信

自  興



平成29年度集冊版

熊本県立東稜高等学校

生徒防災委員会



自興

東稜高校生徒防災委員会

「心の力を大切に」

ジャズトランペット奏者 大野 俊三氏 演奏講演から

平成29年6月16日(金)15:10から本校体育館で、世界的ジャズトランペット奏者の大野俊三さんの講演会が行われました。大野俊三さんは、1949年生まれで岐阜県出身。1974年にジャズの巨匠アート・レイキー氏の誘いで渡米。演奏家、作曲家として活躍をされています。また1984年、1988年の2度にわたり、アメリカで最も権威のある音楽賞の一つであるグラミー賞を受賞されています。

受賞後、交通事故やがんなどトランペッターとしては致命的な傷を負いながらも不屈の精神力で克服。演奏活動を再開されるまでに回復されています。

2013年には世界最大級の国際作曲コンペティションにおいて世界120カ国、約2万人の中から、日本人で初めて、グランプリに輝かれています。



大野さんは、東日本大震災発生以来、今日までの間、来日の度に被災地の小中高等学校や避難所、仮設住宅などを慰問し、演奏を行われています。

熊本地震発生後は、熊本にも足を運ばれ、昨年秋には、熊本市の中学校で、復興支援のジャズコンサートを開かれています。そして今回の来日においても「被災した高校生のために演奏したい」との思いから、東稜高校での講演、演奏となりました。

講演の中で、「オーバー・ザ・レインボウ」「天空の城ラピュタのテーマ」「翼をください」「聖者の行進」の4曲を演奏されました。心を動かされる演奏で、会場には拍手が鳴り響きました。

また、生徒に向けて、「虹は希望の象徴。オーバーザレインボウを演奏したが、雨が降らないと虹は出ない。人生も土砂降りの時がある。」「人生は順風満帆な時だけではないではない。負けたときにどうするかが大切。勝ったときにそれが次の負ける原因となることもある。勝ち負けを人生にどう活かしていくか考えてほしい。」

また「自分も事故でトランペットを諦めると医者に言われた。人に言われて諦めるぐらいならやめた方がいい。心の力を大切にしてほしい。自分が諦めなければ、周りも必ずサポートしてくれる人がいる。常にポジティブに前に進む気持ちがあると必ず応援してくれる人が出てくる。またトランペットの演奏力の前に人間として尊敬されるかどうかが大変。心をしっかり持ってほしい。」「昨日の自分より今日の自分、今日の自分より明日の自分。他人と自分を比べることなく、自分の良さを認めて、自分の咲かせるべき花を咲かせてほしい。」「今を大切にすること。今をどう生きるか。努力次第で自分は変わる」と力強い言葉をいただきました。



生徒にも感想を聞いてみましたが「何事も諦めなければ素晴らしいことが待っているのだと思った。絶望的な状況から這い上がる精神力や根性をお持ちの方で、すごかったよかった。私もそのような人になりたい。」というものでした。

前向きになることが出来る、演奏に感動できる素晴らしい講演をしていただいた大野さんに心より感謝します。

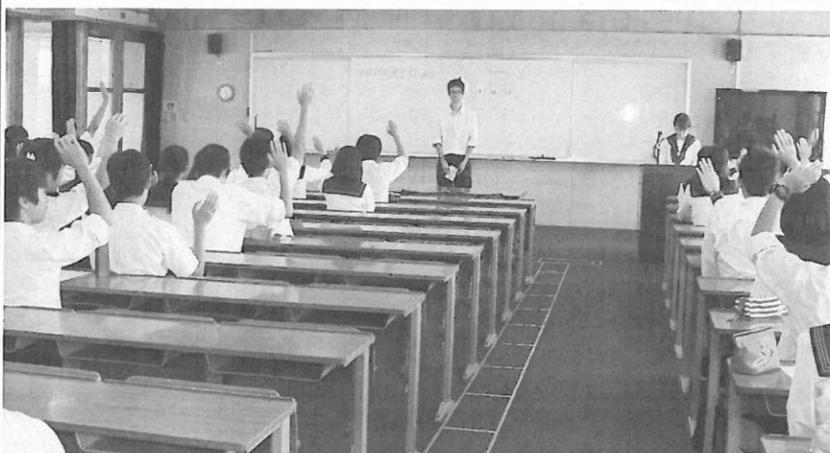


自興

東稜高校生徒防災委員会

「東稜高校が地域の頼りとなるために」

東稜高校生徒会に生徒防災委員会発足



去る5月26日(金)16:00から、L1教室において、生徒防災委員会の設立のための会則の改正を議題として生徒議会が開かれました。

松井会長の開会挨拶のあと、姥嶽副会長から提案理由の説明があり、審議の上採決があり、改正案が賛成多数で可決されました。

今年度は、既に各クラスの役員が決定しているため、代議員(学級委員長)が防災委員を兼務し、生徒防災委員会を構成する

ことになりました。

熊本地震から1年が経過しましたが、14年後には、熊本地震後に生まれてきた生徒が本校に入学してくることになります。震源地に近い本校は熊本地震の影響で、教育活動の中断を余儀なくされ、避難所にもなり、施設等にも大きな被害を受け、体育大会も中止となりました。

しかし、教育活動中断を余儀なくされていた期間に、在校生や卒業生がボランティアとして活動し、地域の大きな支えとなってくれました。彼らは「高校生はもはや守られる立場だけではなく、守る立場でもある」ことを教えてくれました。

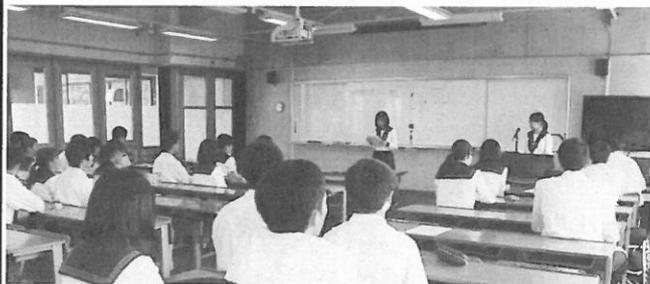
これらの活躍や体験等を風化させずに語り継ぐために、生徒会内に生徒防災委員会

会を新設しました。防災に関する通信の発行や地震発生日には毎年生徒防災集会を行うなどして、生徒自らが学び、行う防災教育の永続的活動のシステムの構築を目指します。

また、思い出すことも辛い体験ですが、熊本地震を語り継いでいくことは、地震を経験した私たち世代の義務であり、責任であると考えます。また地震に限らず、防

災への意識を常に保つことが大切だと考えます。今後の災害に対しての防災、減災の礎となるのは人材です。

7月6日(木)には、防災教育のLHRを行います。東稜高校が、私たち一人一人が、地域の頼りとなるように、技能を身につけ、心を磨いていきましょう。





未曾有の災害や惨禍を不屈の精神で乗り越えて 最前線の現場から 福島医科大学 入学式辞より

(前略) ご存知のように、2011年(平成23年)の東日本大震災、原発事故以降、本学は、他の医学部や医科大学の使命である「教育」「研究」「診療」に加え、新たな歴史的使命を負うことになりました。それは将来にわたり継続して県民の健康を見守ること、そして、この災害とその対応のすべてを記録し、学び、次の世代へ伝えていくことです。すなわち、本学は、不安を抱える県民・国民を支え、この災害と惨禍に対して最前線に立ち続けることを運命づけられた大学と言えるでしょう。

今、私たちが直面しているこの試練は、「過去に例がない」とよく表現されます。しかし、福島は過去にも未曾有(みぞう)の災害や惨禍を不屈の精神で乗り越えてきた歴史があります。さきほども述べましたが、戊辰戦争の戦火の中、傷ついた兵士の治療にあたった医療者たちが、国内でもいち早く、この地に西洋近代医学を導入しました。当時の医術教育機関であった須賀川医学校が本学の前身となったのです。そして、そこで学んだ第1期生のなかには、関東大震災後、壊滅した街の復興を推(お)し進め、現在の東京の礎(いしずえ)を作った復興院総裁 後藤新平(ごとう・しんぺい)がいます。さらに1888年(明治21年)の磐梯山大噴火という自然災害に対しても、創立当時の日本赤十字社、いわゆる日赤と福島の医療者は、協同で敢然と復興に立ち向かいました。

本学の先達(せんだつ)は、壮絶な歴史の中で、当時の先端医療を駆使し、災害救護にあたり、街の復興に力を尽くしてきた経験を持っていました。激動の世相の中でも医療の充実と発展に貢献し、優れた医療人の育成、医学の進歩・発展に努めてきたのです。

このように福島と本学の歴史を振り返るとき、本学の先達が目の前の状況を的確に把握し、いかなる過酷な状況に対しても決して折れることのない「しなやかさ」をもって対応していたことが分かります。そうすることで医療者としての知識を得、思考を深めると同時に、人間としての幅を広げていったのです。

そして、このことこそ、私たち福島県立医科大学が、世界に誇れる先達から受け継がれてきたDNA、すなわち「resilience(レジリエンス)」(※)です。困難な状況にしなやかに適応して未来を切り開く力です。

レジリエンスの根幹は「しなやかさ」です。これから皆さんは、この学び舎(まなびや)で、それぞれの分野でプロフェッショナルになるための厳しい修業に入ります。君たちを温かく指導してくれる先輩から常に言われる言葉があります。それは、「修行とは矛盾に耐えること」です。そして、医療は、まさにその最前線です。

皆さんが医療の現場で向かい合う相手は、その方になんの落ち度もないのに、病(やまい)に苦悩している人たちばかりです。我々医療者は当然、全力を尽くして診療にあたります。しかし、病める方々は、直接の担当者である我々に、様々な不平・不満をぶつけてきます。なぜなら我々しかいないのです。

理不尽に感じるかもしれませんが、これが現実です。この不条理と矛盾に満ちている現場において、知識や技術の習得は、医療者の最低限の条件でしかありません。人を思いやる心に満ち、かつ信頼されるだけの良識や人間的な力が必須となります。

この不条理と矛盾に満ちている医療の現場でプロを目指す皆さんは、何度も失敗や挫折を経験するでしょう。しかし、精神科医の齋藤茂太(さいとう・しげた)先生曰く「人生に失敗がなければ、人生を失敗します」。これらの試練を、鍛錬の機会ととらえ、本学のDNAである不屈のレジリエンスの精神で、しなやかに対応してください。

先月、震災直後に、本学に入学してきた110名以上の方が卒業しました。すなわち、震災後満6年が経過したのです。この間、県や国の支援の下(もと)、本学には多くの施設や優秀な人材が集う組織が整えられました。震災前の教職員は約1,900名でしたが、現在3,000名を超えました。誰もが高い志を抱いて、この復興の最前線の医大へ結集しました。これは、本学が様々な面において、「可能性の塊」となったといっても過言ではありません。整備されたこれらの施設や組織を駆使し、最大の成果をあげることを目標とし、我々は、新たな未来の開拓に、不屈の精神でチャレンジする次のステージに入ります。

皆さんも、志をもって福島へ集まっていただきました。医大の誇るレジリエンスを武器に、その志を実現してください。君たちは我々の希望です。夢や希望を実現しその実績を持って、県や国はもとより、世界でも活躍してください。

これが、「福島県立医科大学で学ぶ者、一人ひとりの使命と心得ること」を伝え、入学式辞と致します。諸君の健闘を祈ります。

平成29年 4月 5日 福島県立医科大学 学長 竹之下 誠一



自興

東稜高校生徒防災委員会

受信型から発信型へ ～生徒間交流を通して学んだこと～

京都府立東稜高校訪問報告生徒会長 三森菜月

9月15日に京都府立東稜高校を訪問しました。京都府立東稜高校さんとは、校名が同じということから、熊本地震の際に、支援を受けたことが切っ掛けで交流が始まりました。今年も7月26日に本校に来られ、学校紹介や案内、意見交換などの交流をしました。

東稜高校に到着すると、校門で先生方が笑顔で迎えてくださり一気に緊張がほぐれました。それから部屋に案内されると、京都東稜高校の文化祭で展示されたという、本校との生徒間交流の様子を写した写真などを見せていただきました。熊本と京都はとても離れていますが「心でつながっているんだな」と感動しました。



それから中庭に案内されまし

た。すると全校生徒の皆さんが休み時間にベランダに出てきて歓迎してくださいました。さらに吹奏楽部の演奏や、野球部のエールなどとても感動しました。今回また、義援金をいただきました。防災・減災や復興のために大切に使いたいと思います。

その後別の部屋に移動し、意見交換などを行いました。はじめに本校が事前に用意していた質問に丁寧に答えていただきました。

それに加えて京都東稜高校の教育システムや取り組みについてもパワーポイントを使いわかりやすく、説明していただきました。京都東稜高校には1年次はアカデミーコース・キャリアコース・総合コースの三つのコースがあります。2年生になるとキャリアコースは、ライフスポーツ・ライフサポートに分かれます。そこに来年から導入されるのが、ライフマネジメントです。ライフマネジメントでは想定外の困難や既存概念では対応できない問題を自分たちの力で解決する力を身につけます。また、環境（持続可能な社会づくり）・公共（安全・安心な社会づくり）・防災（リスクマネジメント）の3つのテーマを掲げ社会貢献できる人材育成をしています。具体的な活動としては、地区の避難訓練参加など地域と協力してボランティアを行ったり地域防災マップを作ったりしています。



その後、京都東稜高校さんが地域の人を集めて行ったという避難所運営ゲームHUGを行いました。実際に、避難所の運営をする側の気持ちになって取り組みましたがとても難しかったです。



京都東稜高校を訪問して学んだことはたくさんありましたが、やはり京都と東北また熊本では被災の様子やその影響は異なります。やはり自分たちの防災、東稜高校の防災、熊本としての防災を作り上げ、防災を教わる側から、情報を発信する側、つまり受け身から主体的になることが大切だと思いました。





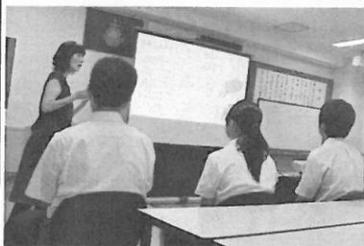
白興

とりあえず動きましょう

～災害で活躍するのは皆さん方です～

研修報告

8月22日(火)午前9:30分から熊本商業高校内蛟竜館1階で、熊本県教育委員会主催の避難所運営ゲーム研修が開催されました。東稜高校からは生徒防災委員が8名、熊本商業高校の生徒会6名、湧心館高校の生徒会7名の計21名が参加、講師には、福島大学特任教授本多環先生をお招きして、前半は防災に関する講義が、後半は避難所運営ゲームが行われました。(避難所運営ゲームは、通称HUGと呼ばれています。(ひ難所のH、うん営のU、ゲームのGの頭文字をとってHUGと呼ばれています。)

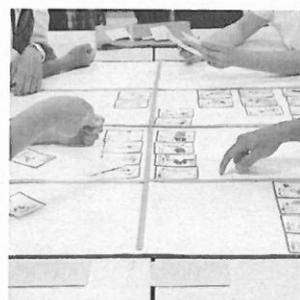


前半の講義では、アイスブレイクのために、竹籤タワーゲームが行われました。21名を4班に分けて、竹籤と粘土を用いてより高いタワーを作ることを競うなかで、班員の親睦を深めていきました。その後、防災の基本についての講義がありました。「防災の基本は、①防火②耐震補強③家具固定④避難行動訓練⑤避難経路・避難場所の確保と確認」「自然災害は今のところ防ぐことが出来ない。防災とは被害が大きくなるように防ぐこと」

「避難所では知らない者同士が協力してやっていくため、伝え合うことが大切」「とにかく発言する」「否定するのではなく、発言を受け止めてより良い提案をすること」「それぞれの経験、知識、想像力を出し合っていくことが大切」「正解がないので、みんなで協力して、より良い判断を積み重ねていくことになる」「意見は違って当たり前。意見は違っていた方がいい。意見はより多い方がいい」など示唆に富むものでした。

講義の中では、「大切な人がタンスの下敷きになっていて動けない状態。タンスは一人では持ち上がらない。火事が迫っている。あなたはどうか行動しますか」など厳しい判断が求められる状況が与えられ、これらのことをどう判断するか、生徒は真剣に考え、議論していました。

後半では、HUGが行われました。HUGとは、発災直後次々とやってくる避難者を、避難所となっている体育館にどのように受け入れていくかを班員で話し



合いながらすすめていくシミュレーションゲームで、最終的に出来上がった避難所は、各班とも全く違ったものになっていました。

本多先生によれば、「間違っているかもしれないが発言することが大切。発言がもし否定されたら新たに提案すればいい。とにかく行動しましょう。」というアドバイスをいただきました。

HUGの最後に、「災害に立ち向かうのは、警察、消防、行政だけではありません。自分が学んだこと、やってきたことを災害時に生かせる人になってください。(災害時はいろいろな技能能力を持った人が必要)災害で活躍するのは、警察・消防・行政だけではない。皆さんなのです。」という言葉で締めくくられました。

生徒の感想の中には、「研修の内容は日頃の生活でも役立つ」「冷静な判断力を身につけたい」「次は心のケアについて学びたい」などがあり、研修を通して、生徒は多角的な視点で地域を見る目を養い、安心・安全な社会づくりに貢献する態度が身についたと思われます。



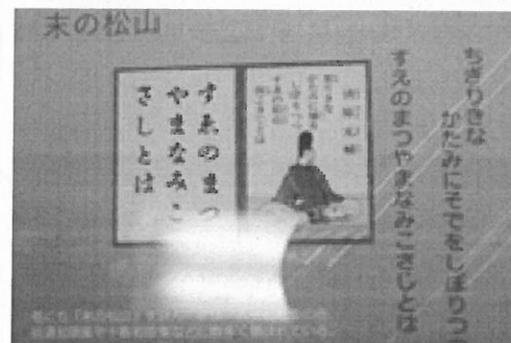
白興

東稜高校生徒防災委員会

一人一人が意識を高くして生活をしましょう 多賀城高校訪問、松島の歴史学び

生徒防災委員長 山本 汐莉
生徒会長 三森 菜月

平成29年8月24日(木)、25日(金)に東北研修に行ってきました。1日目は、宮城県多賀城高校を訪問しました。熊本地震の際、本校に義援金を送ってくださったことを切っ掛けに、多賀城高校とはこれまでも何度か生徒交流を行っています。学校訪問では、はじめに多賀城高校について紹介をしていただきました。その後、震災後に多賀城高校の生徒さんが作られた多賀城津波伝承「まち歩き」MAPを見ながら、まち歩きをしました。まち歩きでは、実際に津波が来て、たくさんの方が避難されていた歩道橋や、宝国寺にある樹齢約500年の黒松である「末の松山」などを案内してくださいました。「末の松山」には、869年、今から約1200年前の貞観津波も来なかったとされており、百人一首の和歌にも詠まれています。東日本大震災の時も松山に避難された方は助かったそうです。1000年以上の時を超え、和歌という形で防災について伝えられてきたことに驚きました。また、多賀城高校の生徒で街中によって設置された20ヶ所の津波標識を拝見しました。多賀城の津波は都市型津波という大変複雑な珍しい津波で、世界中から研究者が入っているとのことでした。



多賀城高校の皆さんとの記念撮影

その後、多賀城高校に戻り、生徒会と災害科学科の生徒さんと交流会を行いました。そこでは、多賀城高校にある災害科学科についての紹介がありました。また、事前に用意していた質問にも丁寧にわかりやすく説明してくださいました。生徒さんの積極性と明るさが印象に残っています。災害に関することだけでなく、街の魅力も同時に伝えるように心掛けているそう



多賀城高校の皆さんとの記念撮影

です。「スマイル・防災」がキャッチフレーズだそうです。またボランティアも労働力提供型のボランティアだけでなく、生徒自らの特技を活かして提案型、課題解決型のボランティアを行っておられ、観光地で生徒バンドがフェスを行い、地元を盛り上げるなど、大変勉強になりました。

2日目は、多賀城高校の校長先生が計画を立ててくださり、宮城県松島高校の先生と一緒に松島の町の案内をしてくださいました。松島は歴史ある建物や、伝説がたくさんありました。由来やエピソードなど教えていただいたので、街に魅力を感じ、またいつか松島に來たいと思いました。その後、9メートル級の防波堤を見せていただきました。実際に近くで見るととても大きく感じました。

その後は、多賀城高校に戻り、学食で昼食を食べさせていただき、午後からは、5時間目に行われているいろいろな授業を見学させていただきました。ipadを使った授業や、防災科学科の「生命環境科学」や「くらしと安全」の授業など東稜高校にはないものがたくさんありました。

今回の東北研修では、たくさんのお話を学びました。中でも震災時の状況や、地震に対する備え、防災に対する一人一人の姿勢など多くのことを学びました。今回防災に関して学んだことを、周りに伝えていくことが大切だと思いました。

他人事ではなく一人一人が意識を高くして生活を送っていきましょう。



自興

東稜高校生徒防災委員会



「人との繋がりの大切さを実感」

熊本×東北 IWAKI HABATAKI
復興の輪プロジェクト 参加報告

参加者 井上愛海、米森美咲、遠山奈月、渡邊有帆

IWAKI HABATAKI 復興の輪プロジェクトとは、宮城県と東京都を会場として、「震災を経験した私たちだからこそ出来る支援を熊本に」をスローガンに、熊本の同世代の人たちとともにお互いの将来や復興について考えるプロジェクトです。震災体験、復興への想いを共有する場を作り、東北と熊本を繋げ、またそれぞれの地域で活動する切っ掛け作りを行い、持続可能な環境づくりに努める取組です。

プロジェクトに参加して

◇私がこのプロジェクトに参加して感じたことは、人との繋がりが大切であるということです。熊本と東北では地震の被害も大きく違いました。しかし、どちらも人との繋がりは大切であり、助けられた場面がたくさんありました。私は、繋がりを大切にするためにも日頃から挨拶など小さなことから大切にしていきたいと思います。また、自分に何が出来るのか、どういうことができるのか考えるようになりました。1週間でしたが、自分のことについて考え、様々な地域での助け合いや繋がりを感ずることができました。(渡邊)

◇日程も急遽変更になり、出発時間が早まったりと早々から不安も多いプロジェクトでしたが、体調を崩すこともなく無事終えることができ良かったです。普段日常生活では話す機会のない震災への思いや、自分の震災体験について話すことができ、改めて熊本地震を振り返るとても良い機会でした。(遠山)

◇今回のHABATAKIプロジェクトに参加できたことは私にとってとてもいい経験になりました。私はこのプロジェクトで特に印象に残っていることが2つあります。1つ目は、東日本大地震で被災した地域のことです。テレビでは、震災から6年経った今でもがれきの撤去などがされておらず、復旧がまだまだのように映っていました。でも、実際見に行ってみると、復旧どころか今回のことを生かして工夫された建物が多くありました。実際に自分の目で見ることはとても大切なことだと思いました。2つ目は、自分自身のことです。私はもともと人に自分の意見を言うことが苦手でした。でも、ある夜のシェアリングで、同じことを経験した仲間と話したり聞いたりすることができて、自分のことを話すことに対して抵抗を感じる事が少なくなりました。普通に生活していれば、絶対に会えない人たちと出会い、喋ることができたので、このプロジェクトに参加できて良かったです。この経験が無駄にならないよう、自分にできることは積極的に参加しようと思いました。(井上)

◇私はこの活動に参加して、改めて震災の恐怖や残酷さ、防災の大切さを実感しました。そして、特に強く感じたことが、自分があまりにも無知だったということと、直接行って見ないと分からないことがほとんどだということです。実際、私の東日本大震災に関する知識はマスメディアのみでした。それでも私は、その震災のことを、さも全部知っているような気分でした。しかし、HABATAKIに参加し、初めて東北の人達と交流したとき、本当に衝撃を受けました。以前の私の知識は、この交流で知ったことの1割にも満たないほどでした。また、以前想像していた東北の町と、実際見た東北の町もかなり違いました。私が想像していた現在の東北の町は、あれだけひどい被害にあったのだから、ほとんどまだ更地だろうと思っていましたが、まだまだ工事は多いものの、意外にも駅や商店街ができていて、復興が進んでいるのを身に染みて感じ、なんだかとても感動しました。このプロジェクトに参加できて心から嬉しく思います。自分の視野がたった一週間だけで、何倍も、何十倍も広がりました。とても楽しかったです。しかし、その気持ちと同じくらい胸が締め付けられるような気持ちになることもありました。いつ起こるのか誰も分からないからこそ、いつまでもこの気持ちを忘れずにいなければならないと思い、また、私が体験してきた貴重な東北での話を、まだ知らない人達にも伝えていきたいと、初めてそんなことを思いました。成長できたかは分からないけど、自分を変えてくださったこと、本当に感謝しています。また来年も参加したいと思っています。ありがとうございました。(米森)

櫻井友香さんをはじめIWAKI-HABATAKIプロジェクトのスタッフの皆さん、このような機会を私たちに与えていただき本当にありがとうございました。



プロジェクトの内容
8月3日～8月8日
(宮城県)
巨理町での植樹
国際交流
石鹸づくり体験
女川町探索
シェアリング
(東京)
ワークショップ
プレゼンテーション





白興

東稜高校生徒防災委員会

自分のためにボランティアに行こう

3年生の志望理由書やエントリーシートなどの添削指導をしていると、多くの生徒はボランティアに参加したことを書いてきます。しかしよく読むとボランティアに参加することが目的となっているケースに出くわします。大学側が知りたいのは、ボランティアを通して、何を感じ、何を考え、どのような問題意識を持ち、どのように受験生が主体を変容させ、成長したかだと思われま

今回は、7月に兵庫県西脇市で行われた全国防災ジュニアリーダー研修会の中で行われた講演会「ボランティアについて考える」(講師 舞子高校 和田先生)の内容を紹介します。

ボランティアで、自分自身を高めてください。とにかく参加してみましょう。

■まず、返事が良くない。行動がてきぱきしていない。「お願いします」「ありがとうございます」が一番に言えるような人になることが大切。

■ボランティアには、大きいボランティアと小さいボランティアの2種類がある。皆さんが想像するのは大きいボランティアだと思う。バスで席を譲る、募金をするなどの小さなボランティアが大切です。

■専門家によっても若干異なるが、ボランティアには5つの要素がある。それは

- ①社会性(公益性) 学校を休んで行くものではない。周りに迷惑をかけてするものでもない。
- ②自発性(自主性) 人に言われてやるものではない。周りに認められるためにやるものでもない。
- ③創造性(独自性) 得意なこと、やれることをやればいい。
- ④無償性 お金をもらわない(仕事でやるわけではない)
- ⑤継続性 続けてやること

■復旧は災害前の状態に戻すこと。復興は災害の前よりも良くすること。ボランティアは復旧、復興のために行うことがほとんど。「してあげる」ではなく、「させて頂く」という気持ちが大切。「してあげる」という人にボランティアをしてほしい人はいない。ボランティアを続けると、このことがわかってくる。「ありがとうございます」と言われてうれしかった。またボランティアを頑張りたい。」はいかがなものか。「ありがとう」は、あくまでも副産物。目的ではなく結果。結果的に言われるのはいいが、ありがとうございますと言われるためにするものではない。ただし、ありがとうございますという温かい言葉をいただくことと人の優しさを知ることが出来る。

■ボランティアの目的は、依頼されたことをきっちりやること。役に立つこと。役に立つことをさせて頂くことです。特に若者にしか出来ないことがある。それは、体力と繋がる力。若いと体力がありよく動くことが出来る。また、若いとすべての世代に対応できる。同世代の人は勿論、子どもとも、高齢者とも、仲良くなる事が出来る。話が出来て繋がりが出来たら、その繋がりを持ち続けること。話をさせていただいて有り難いという感謝の気持ちを伝え、地元に戻って伝える。最低でも2回は同じ場所に足を運ぶこと。繋がり続ける。伝え続ける。語り続ける。

■ボランティアの負の部分もある。へこんで返ってくることもよくある。役に立てない。技能がない。迷惑をかけた。空振りも最初は多いが、振らないとあたらない。失敗していい。微力であるが無力でない。復旧はボランティアの力だけで出来るわけがない。失敗を糧に前進すること。(まず参加することが大切)

■行く前には、事前学習(地名、歴史、名産品、被災状況など)、体調管理、積極的傾聴を。聴く力が大切である。



自興

東稜高校生徒防災委員会

防災教育(II) 講演会録 要約

「魂の復興とこれからの災害の備え」

神戸学院大学現代社会学部社会災害学科 教授 前林 清和先生

- 私も阪神淡路大震災で被災した。皆さんも大変な思いをしたと思う。今も大変だと思う。
- 熊本はまだ1年しか経っていない。街の復興・復旧、生活の復興・復旧、魂の復旧・復興はこれからだと思う。阪神淡路から22年経ったが魂の復興はまだまだ。地震という災害の特徴は、心理的なダメージが大きいこと。地震の揺れは、足下、身体、心、魂、そしてすべてを揺らす。現在、熊本は再適応期に入るあたりだと思う。
- 災害は忘れた頃にやってくるはもはや常識ではない。災害はいつもやってくる。地震活動期に日本は入った。また気候変動による風水害も頻発している。国連では日本を災害の多い国4位としている。世界の陸地の0.3%という狭い国土にもかかわらず、世界で起こったM6以上の地震の20%が日本で起きています。日本には4つのプレートがあり、活断層は約2000もある。
- 日奈久断層は日奈久区間でSランクとされており、M7.5が30年以内に0~6%、八代海区間がSランク、M7.3が30年以内に0~16%（全国的に言うと3番目の確率の高さ）とされておりしばらくは熊本は大丈夫は間違いである。地球規模で言えば30年で16%は相当高い確率。
- さらに南海トラフは30年以内に70%、10年以内が20~30%とさらに高く、確実に来る。阪神淡路で死者が約6500人、東日本で約19000人だったが、南海トラフでは323000人の死者が予想されている。大分、宮崎、鹿児島でも甚大な被害が予想され、避難者などを九州全体で吸収することになる。熊本にも多くの避難民が来ることが予想される。
- 気候変動による豪雨被害や台風被害にも備えること。昔は1時間に50mm降ればバケツをひっくり返したような雨といって驚いていたが、今は1時間に100mmの豪雨が日本各地で起きている。雨の降り方が変わったのである。
- 自助7、共助2、公助1の割合である。若い力こそ多くの命を助ける。まずは自助。しっかりと自分の命を助ける能力を身につけること。自分自身の防災能力を高めて、他人の命を守ってほしい。そして生涯にわたって主体的に自分の命を守り、他者を助けることが出来るようにしてほしい。
- ①日常と非日常を的確に分けること、②非常事態宣言を自分の心に出すこと、③想像力を発揮し、決断力を持って即決することが災害時には大切。火事場の馬鹿力はありません。日頃の訓練を続けてほしい。避難訓練は大切。



自興

東稜高校生徒防災委員会

今回は、2017年9月15日(金)付け日本経済新聞からのものです。今若者を中心に防災士の資格を取る人が増えています。

日本経済新聞

2017年(平成29年)9月15日(金曜日)

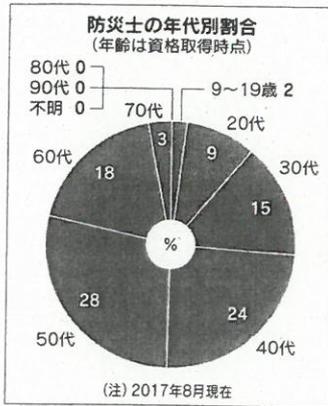
防災意識が高く、一定の知識・技能を習得していることを示す民間資格「防災士」を高校生に取得させる動きが広がっている。首都直下地震や南海トラフ地震など、発生が懸念されている大規模災害に向けて、若い世代を地域の防災リーダーに育てるのが目的。資格取得という具体的な目標を示すことで、生徒の学習意欲を引き出す狙いがある。

「防災士はどんな困難に出合っても命を守る役割があります」。8月下旬、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県南三陸町のホテルで、元消防士の講師が東京都内の高校生ら101人に語りかけた。

「防災士はどんな困難に出合っても命を守る役割があります」。8月下旬、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県南三陸町のホテルで、元消防士の講師が東京都内の高校生ら101人に語りかけた。

育て 若き防災リーダー

資格取得 後押しの動き 中高生向けにキャンプや講座



一連の研修は防災士の養成カリキュラムの一環となっており、試験に合格すれば資格が得られる。参加した高1の大野千星織さん(15)は「テレビで東日本大震災のボランティアを見た。



防災キャンプで学んだことをグループごとにまとめる高校生(宮城県南三陸町)

「一連の研修は防災士の養成カリキュラムの一環となっており、試験に合格すれば資格が得られる。参加した高1の大野千星織さん(15)は「テレビで東日本大震災のボランティアを見た。

「一連の研修は防災士の養成カリキュラムの一環となっており、試験に合格すれば資格が得られる。参加した高1の大野千星織さん(15)は「テレビで東日本大震災のボランティアを見た。

▼防災士 NPO法人「日本防災士機構」(東京・千代田)が認定する民間資格。阪神大震災の教訓を生かし市民による防災の取り組みを進めるため、2003年に同機構の創設とともに設けられた。同機構が認定する研修機関で講義を受けたうえで、試験に合格する必要がある。救急救命講習も受けなければならない。8月末時点で13万3千人が認定されている。同機構によると、資格取得者は40~60代が多いが、ここ数年は10代が増えている。

日本防災士機構によると、防災士の資格を持つているのは全国で13万3700人(8月末時点)。このうち9~19歳は3049人で、全体の2%にとどまる。若い世代の資格取得者は右肩上がりが増えてきているが「ほかの世代に比べればまだまだ」(同機構の担当者)なのが悩みだ。

若年層の意識向上課題 9~19歳の防災士は2%

阪本真由美・兵庫県立大准教授(防災教育)は「小中学校は授業で防災を取り上げることが多いが、高校では大学受験に関係ないことなどを理由に軽視しがち」と指摘する。「資格取得は防災を学ぶきっかけになるが、ゴールではない。地域の避難訓練に参加するなど経験を重ね、実際の災害現場でも活躍できるようにしてほしい」と強調する。

「一連の研修は防災士の養成カリキュラムの一環となっており、試験に合格すれば資格が得られる。参加した高1の大野千星織さん(15)は「テレビで東日本大震災のボランティアを見た。」と話す。

「一連の研修は防災士の養成カリキュラムの一環となっており、試験に合格すれば資格が得られる。参加した高1の大野千星織さん(15)は「テレビで東日本大震災のボランティアを見た。」と話す。



自興

今回は、Science Window2017 10-12 (国立研究開発機構科学技術振興機構刊)からのものです。

今、防災は、ハードからソフトへ重心を移しつつあるようです。皆さんもスマートフォンとなく、防災を、科学的根拠を持って、これから防災について、考え、学んでください。⇒スマートフォン

工学的な説明だけでは、災害から人々の命は守れない

あらゆる自然災害から私たちの生かす命を守るためにはその災害のメカニズムを科学的に説明することが欠かせない。科学的な知見は工学に生かされ堤防や避難施設といった設備と、行政の避難計画などが整備される。しかし、こうした工学的なアプローチのほかにもう一つ、見落されがちだが大切なことがあると東京大学特任准教授の関谷さんは指摘する。

「私は災害そのものだけでなく、人間が災害に直面した時にどのように行動するかを明らかにする必要があります」と考えています。人間の心理と行動を理解することが災害から人々の命を守ることに繋がります。

関谷さんは学生時代から環境問題に対する人間の心理と社会への影響に災害をもち、現在は社会心理学的に災害の研究を続けている。東日本大震災以降は積極的に被災地を訪れ、現地調査を重ねながら未曾有の大震災に対して人々がどのように行動したかを研究している。

事実を単純化し過ぎた「車の避難は危険」という通説

東日本大震災が発生した時津波に押し流される自動車の映像がテレビで繰り返し流れたメディアは津波の時に自動車で避難するのは危険

ではないかと問題提起した。しかし関谷さんは、自動車による避難は誤った行動だと決めつけるべきではないと考えている。

「津波が発生した地域では、公共交通機関による避難はできません。た。山が迫る地形では自転車も使えません。普段から使っている自動車

で逃げるのは当然の選択でした」。東日本大震災の浸水地域の住民数は推定で約60万人だった。このうち死者は約1.8万人。58.2万人が助かり、その約半数の30万人が自動車

人間の心理と行動を考えた 無理のない防災対策を

災害に直面した時、私たちは何を感じ、どのような行動をとるのだろうか？ 社会心理学の観点から日本の防災のありかたについて研究を続ける 東京大学特任准教授の関谷直也さんについて聞いた。

関谷直也

(せせやなおや) 東京大学大学院情報学環 総合防災情報研究センター特任准教授、福島大学つくしほふくし未来支援センター審判准教授

自動車に避難すると道路が渋滞して、避難が遅れるという指摘も聞かれます。しかし、関谷さんの調査によると東日本大震災では、気仙沼市や石巻市、仙台市近郊では大規模な渋滞が生じたが、それ以外では渋滞は起こらず、自動車でもスムーズに避難できた地域は多数あったという。こういった事実が示すのは、車の

避難を律に禁止するのではなく、経路・通行量、人口など、地域ごとの事情を踏まえて考えるべきだということです。にも関わらず、津波の時は車で逃げてはいけないという考えが通説になってしまいました。この現象の背景にあるのは「ステレオタイプ」という人間の心理です。私たちは、複雑で膨大な情報を記憶

し、理解することができないため、他人の心や世の中で生じている出来事を理解する時に、それらを単純化しようとする心理が働くという。この単純化した描像が「ステレオタイプ」で、自動車で避難するのは危険という通説も、避難行動にはさまざまなパターンがあることや地域の事情が省かれたステレオタイプから生まれたものだという。

防災 同答 どう思う？

日頃から、防災への意識を高めておくのはとても大切なことだ。でも、普段から防災のことを頭の片隅に置いていたまま生活することなどないだろうか？



気まぐれの防人

広域避難場所に指定されている東京大学本部キャンパス。「都心で大地震が起きたら、まず火災のリスクを判断して、鎮火するまでは広域避難場所を避けてほしい」と関谷さん。

そのときどうするべきか、体験に学ぶ 宮古市田老の「学ぶ防災」

岩手県宮古市の田老地区は、慶長三陸地震津波(1611年)、明治三陸津波(1896年)、昭和三陸津波(1933年)など、たびたび記録的な大津波の被害を受けてきた。1966年には高さ10m、総延長約2.4kmの巨大大防波堤を完成させたが、東日本大震災(2011年)の大津波でその一部が倒壊し、再び壊滅的な被害を受けた。巨大な堤防だけでは住民の命は守れなかった。命の重さを身をもって体験した人たちがガイドとなり、田老を訪れる人に向けて「でんでんご」の大切さを伝える。(一般社団法人宮古観光文化交流協会 学ぶ防災係 TEL:0193-77-3305)



「学ぶ防災」では、田老の防波堤に立ち、ガイドの語る311を聞く。「たろう観光ホテル」(2016年撮影)の6階では、そこで撮影された当日の映像を見ることが出来る。





白興

東稜高校生徒防災委員会

安全第一 東稜高校周辺 安全マップ



学校周辺で苦情が多い地点とその内容

- ① 並進の苦情が多い。道幅が狭く、自動車同士もどちらかが停車しておかないとすれ違うことができない。
- ② 登校時に裏道を抜けてくる生徒多数。信号待ちの車列の間から飛び出す生徒がいる。
- ③ 変則的な交差点。交通量が多く信号機もないため安全を十分に確認して横断歩道を渡る必要あり。
- ④ 信号の点滅や赤信号で強引に渡る生徒があり、苦情が多い。
- ⑤ 住宅街の中を抜けてくる生徒がいる。私道のため通行できない。苦情あり。
- ⑥ 登校時に停車中の車両の間を無理矢理抜けてくるため、車に接触する時がある。
- ⑦ 下校時に右側通行する生徒がいる。道幅も狭く交通量が多いため非常に危険。
- ⑧ 止まれの標識があるが、一時停止しない生徒が多い。(自転車は軽車両扱い)

安全マップ作成で皆さんの通学路を見る視点が一つ増えたと思います。日頃から、危険箇所や緊急時、身を寄せることが出来る施設などを記憶しておいてください。東稜高校周辺の道路事情は決してよくありません。日頃から時間に余裕を持って行動してください。一旦停止、安全確認を徹底してください。出来るだけ安全を作り出しましょう。



白興

東稜高校生徒防災委員会

校長賞に2年5組 宮崎 玲君の「浄傘」

2017 防災グッズアイデアコンテスト結果発表

【審査結果】

- 学校長賞 2年5組19号 宮崎 玲
最優秀賞 浄傘（災害時傘で水をためて貯めた水を飲み水に浄化できる機能を持つ傘）
- 優秀賞 3年国組28号 直江 佳香
車中泊を快適にするシート。水に浮くため溺れている人の救命道具にもな
また水を貯めることも出来る。
- 優良賞 2年5組31号 田上 桜
自家発電つき簡易流し。水を貯めることが出来て断水時もある程度使用でき
また引き出しには、水回りの生活用品が備えるけられている。
- 優良賞 2年3組22号 五十嵐 千紗
カプセル入りコンパクト液体歯磨き。口に含むだけでカプセルが溶けて、
歯磨きをした状態になり、免疫力低下を防ぐ。
- 優良賞 2年3組36号 西村 唯
スーツケース型簡易ベッド。広げると簡易ベッドになる。リクライニングも
出来て、要介護者の負担と避難所での介助を助ける
- 佳作 2年6組11号 田上 竜誠、2年理組40号 山本 汐莉、2年3組21号 赤星 明佳
2年3組33号 高尾 みくり、1年7組33号 中原 璃良、1年7組 6号 高間 佳杜
1年7組19号 村裕 大地

【評】

被災経験を活かしたものより具体的アイデアグッズの提案が目立った。最優秀賞の作品は、自身の体験から人間の生命維持に必須である水の確保を主題としたアイデアグッズであり、秀作である。優秀賞は一つのものに多くの機能を盛り込み、様々なシーンで役立つように考え込まれた秀作であった。他にも良い作品が多く寄せられ、急遽佳作を設定し表彰の対象とした。被災の経験から具体的なものが多く素晴らしいが、今後は各自の進路希望分野に特化した、多少空想が入っても良いので、画期的提案も期待したい。例えば、電気を有線ではなく無線で送ること、すなわち電気を電波に乗せて送ることが出来れば、震災時の停電は受信機さえあれば解消されることになる。これは、石油資源の可採年限を伸ばすことにも繋がり未来の人たちにも貢献できる。宇宙空間には無尽蔵に太陽光が降り注いでおり、ソーラーパネルを搭載した人工衛星を打ち上げ、宇宙空間から電気を電波に乗せて送れば、無尽蔵に電気が得られることになる。多少空想が過ぎる部分はあるが、現代のテクノロジーはつい100年前までは空想の域にあった。画期的なアイデアを出し、進学先で研究開発する人材になってほしい。時代を創る人が出てくることも期待したい。社会の有為な形成者となるべく日々学問に打ち込んでほしい。(防災主任)



自興

東稜高校生徒防災委員会

避難訓練を終えて 「**憂いがあるから備える**」 命みなぎる行動で生きる希望になってほしい 11月16日(木)7限目 防災教育(Ⅲ) 東消防署託麻出張所 榎崎所長 講評・講話より



■今回の訓練のポイントは3つ。

- ①**命を守る行動が出来たか。**緊急地震速報が入った際または揺れはじめた時点で頭を守る行動がとれたか。
- ②**情報の共有が出来たか。**非常放送等で、避難経路や火災の情報が得られた際に周囲の人と情報を確認し合い、周囲の人に知らせることが出来たか
- ③**行動するときに相互協力が出来たか。**避難中に勝手な行動をしないことは勿論、一時避難したとき人員及び負傷者等の把握のための確認作業に協力できたか。

点呼完了まで6分01秒でタイム的には良かった。



しかし安全に避難することが第一である。

■次に大震災時にとってほしい行動について。昨年の熊本地震がもし昼間であつたら、このように避難した後、地域住民がどんどん学校に避難してくることになる。だから皆さんが避難して無事を確認した後、避難してくる住民の受け入れ態勢を整える準備に協力してほしい。この学校のことをよく知っている皆さんの協力が不可欠。今後はそのこ

とも意識しながら訓練にのぞんでほしい。学校

として、学年として、クラスとして、あるいは部活動として、何が出来るかを考えて、自分自身が出来ること、やるべきことを確認してほしい。

■最後に、「備えあれば憂いなし」と言うが、大地震を経験した君たちはこの言葉が正確でないことを知っていると思う。どんなに備えても憂う。どんなに備えても自然災害は発生し、悲しい場面に遭遇する。だから「**憂いがあるから備える**」と考えてほしい。日頃から備えることで、避けられない憂いを少しでも和らげることは可能。どうか若い皆さんには全員生き延びて頂き、命みなぎる行動力で、多くの方々の生きる希望になっていただきたい。



自興

平成29年11月27日(月)



朝、時間に余裕を持った行動
をご指導ください
交通事故が心配されます

東稜高校周辺道路 注意地点



- 学校周辺で警情が多い地点とその内容
- ①並道の警情が多い。道幅が狭く、自動車同士もどちらかが停車しておかないとすれ違うことができない。
 - ②登校時に裏道を抜けてくる生徒多数。信号待ちの車列の間から飛び出す生徒がいる。
 - ③下校時に信号待ち中の車列を右側から追い越していく生徒多数。正面衝突の危険性大。
 - ④定期的な交差点。交通量が多く信号機もないため安全を十分に確認して横断歩道を渡る必要あり。(生徒通行不可)
 - ④信号の点滅や赤信号で強引に渡る生徒があり、警情が多い。
 - ⑤住宅街の中を抜けてくる生徒がいる。私道のため通行できない。警情あり。
 - ⑥登校時に停車中の車両の間を無理矢理抜けてくるため、車に接触する時がある。
 - ⑥下校時に右側通行する生徒がいる。道幅も狭く交通量が多いため非常に危険。
 - ⑦止まれの標識があるが、一時停止しない生徒が多い。(自転車は軽車両扱い)

東稜高校生 通学状況

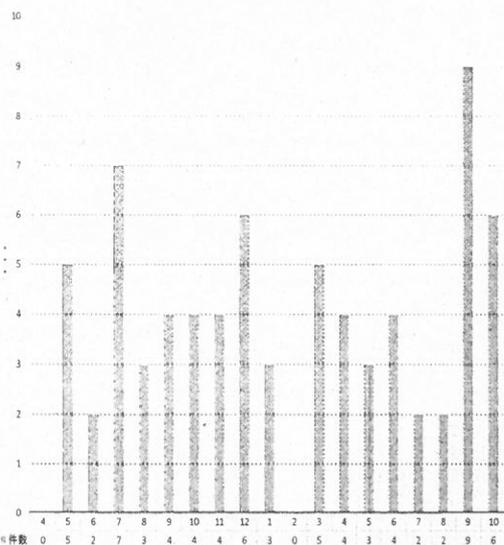
通学距離	～2	2～4	4～10	10～20	20～
%	21	34	34	10	1

通学手段	徒歩	自転車	原付	公共交通機関	その他
%	2	91	3	3	1

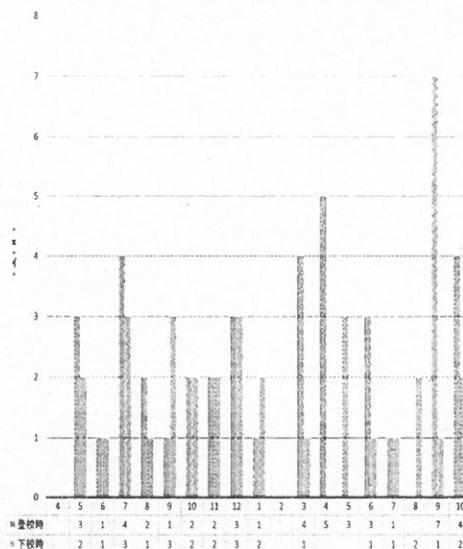
左記の通り、10km圏内が生徒全体の9割、自転車通学する生徒が約9割。つまり900名を超える生徒が10km圏内から、自転車で短時間に通学し、交通集中を起こすこととなります。しかも東稜高校周辺の道路状況は決まっております。

H29 生徒交通事故の発生状況

2016.4-2017.10 事故件数の推移



2016.4-2017.10 時間帯別交通事故件数の推移



曜日別事故発生状況

月	火	水	木	金	土	日
7	6	4	3	6	4	

例年12月に事故件数がピークになるものが、本年度、9月11月に大幅に増えています。これからさらに事故件数が増加することが心配されます。

また、本年度は朝の事故が多く、余裕を持った登校が大切です。

さらに曜日別にもみると、週の始めと終わりに事故が集中しています。

1年生は修学旅行、3年生は入試、2年生もこの時期の学習量が3年生での成績の伸び幅を決める大切な時期です。

時間に余裕を持った、緊張感のある生活を送るよう、ご家庭でもご指導をよろしくお願いいたします。東稜高校は事故0を目指しています。



自興

東稜高校生徒防災委員会

非力な人間の中にある凄さを見いだす

第3学年 防災に関する小論文コンクール 結果発表

優秀賞 3年2組 井上 瑞貴

優良賞 3年4組 丸山 翔大

3年6組 宮崎 準子

3年8組 木村 真南佳

佳作	3年1組	浦田 理来	3年4組	竹下 涼太	3年2組	上村 卓巳	3年2組	坂田 拓樹
	3年5組	岩下 侑加	3年3組	中村 颯希	3年3組	松岡あかり	3年国際	幸 まゆ子
	3年7組	堀 カケル	3年6組	金澤 麻里	3年7組	矢次 隼太	3年理数	中村 太城
	3年6組	川口 朱蘭	3年4組	落合玲於那	3年7組	成瀬 愛水	3年国際	坂本 裕磨
	3年理数	森山 海路						

(評)

熊本地震から1年。被災に濃淡がある状況で、防災意識にも温度差が出てきているように感じ、また今回の地震を感性で捉えるだけでなく、論理でもとらえることが必要ではないかと考え作問した。入試突破のためには、論理的思考能力が重要である。またこれから諸君が出ていく10年後、20年後の社会を考えると、その社会は大きな変革の波がうねり、これまでの経験など通用しない社会が待っている。そのような社会を生き抜くために必要なのは、日本人の精神と論理ではないかと考えられる。

このようなことから、今回の地震を不運で終わらせることなく、地震と正面から向き合い、当事者意識を持って災害への備えについて総括する切っ掛けを与えることが出来ればと考えた。逃げることなく正面から向き合い、考え抜くことで、自助・共助のために主体的に行動する人となり、また本校の掲げる「見えない学力の育成」に結びつけてほしい。

課題Aでは、自分の事に固執することなく、体験談に終始することなく、今回の体験から何を考え何を学んだか。日常の有り難さを訴えることに留まることなく、その先の議論の展開をすることが肝要であった。

人の力ではどうにもならない人智を越えた自然の力を認めながらも、非力な人間の中のすごさ、模範となるべき人々を見いだし、考えを見いだす力が大切であった。

他人事ではないといいながら、他人事のようにとらえている答案、学んだことをはっきりと論じられていない答案、内容はあるが形式を満たしていない答案など、踏み込みが浅い答案が多かったが、全体的には前向きな忍耐力を感じるトーンが目立ち成長と希望があった。

課題Bは、総務省のデータを基にした、データ読み取り方の小論文として出題した。

データ読み取り方の小論文の命であるデータの読み取りは概ね出来ていたが、都合のいいデータのみに触れすべてのデータに触れていないものやデータ間の関連性の考察が甘いものが散見された。また当たり前のことを議論することに終始するものも多くあった。

今回の地震は、生活の基盤(経済)だけでなく、心の基盤(人間関係・コミュニティ)をも揺らした。郷土は傷ついた。しかしこれを機会に、郷土(共同体)の一員として、郷土を見つめ直し、郷土を愛する心を育ててもらいたい。現状回復を目指すだけでなくその先を見据えてほしいと思っている。今後諸君を生徒を待ち受けていると予想されるものは、復興特需のあとに訪れるであろう熊本限定の不況、少子化と相まっての人口流失による地域活力の喪失、AIの勃興による雇用環境の激変などが考えられる。東稜高校で、自らを鍛え、自らを磨き「自律自興」「一点突破」の東魂を身につけた諸君が、これらの課題に勇猛果敢にチャレンジして、地域を支え抜く人材となってほしい。3年生諸君の健闘を祈る。(防災主任)

(最優秀賞は、次号で紹介します。)



自興

「助けられる立場から誰かを守る立場へ」

11月16日(木) 第7時限目、防災・避難訓練が実施され、学年ごとに様々な取組が行われました。

1 学年の取組

- (1) 学年主任・木田先生からの講評
- (2) 熊本市東消防署出張所 井芹様 (本校25期生) による講話
- (3) 水消火器を用いた防消火訓練
- (4) 熊本市東消防署出張所所長 榎崎様による講評
- (5) 生徒副会長渡邊さんによる謝辞



■ 消火器について 本校卒業生の井芹様より、消火器に関するお話を伺うことができました。

【消火器の種類】

- ① 圧力計がついているもの一放出量を調整できる。
 - ② 圧力計がついていないもの一放出量を調整できない。(全部粉がでてしまう)
- ※ いずれの消火器も必ず一度で使い切るようにしましょう。

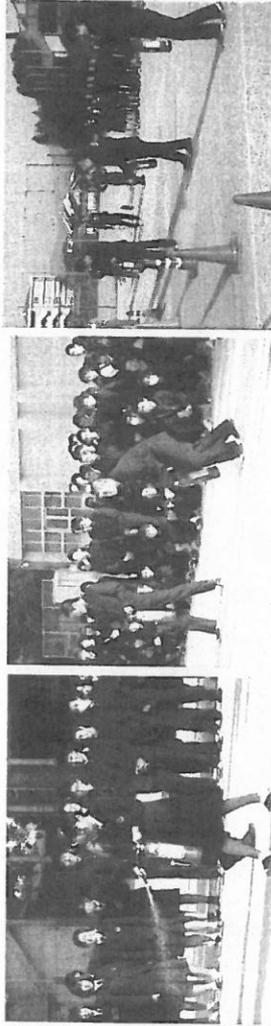
【消火器を使用する火災の種類】 消火器を使用する火災の ABC について教えていただきました。

- A 火災 (普通火災) 近くにある物が燃えている場合
- B 火災 (油火災) キッチン等で油が原因で火災が発生している場合
- C 火災 (電気火災) コンセントなどからの発火が原因で火災が発生している場合

【消火器の使用手順】 3つの「STEP」を覚えましょう！

- STEP1 黄色いピンを抜く「STEP2」ホースをぬく「STEP3」レバーを握る
- ※ 消火のポイントは5m離れたところから霧をばくように火の根本を狙うことです。

消火器はあくまでも初期消火用の道具です。自分の背より高い炎や炎の量が多い場合は迅速に119番通報し、逃げることに！



■ 防災クイズ

実際の消火訓練の様子 (水消火器を使用しています。) 消火器で火元を想定したコーンを狙います。各クラスの体育委員と希望者が挑戦しました。初めて使用する人も何度か訓練したことのある人もいたようです。「練習とわかっていても緊張した。実際に炎を目の当たりにすると、手が震えてしまうかもいけない。」との感想もありました。

■ 防災クイズ

榎崎様より出題された防災に関するクイズをご紹介します！正しい防災知識を蓄えて災害時に備えましょう。 ※ 答えは右下

- Q1 地震発生時、エレベーター内にいた。その場で救助を待つか？ [O or X]
- Q2 地震発生時、屋外にいた。急いで避難するかどうか？ [A 交番 B ガソリンスタンド C コンビニ]
- Q3 地震速報が鳴ったら屋外、Jアラートがなったら屋内に避難する。 [O or X]
- Q4 足が重い物の下敷きになっている人をそのままにして救助隊をその場で待たせ。 [O or X]
- Q5 避難する際、遅いベースに合わせるため高齢者・子どもを先頭に置いて避難した。 [O or X]

■ 1 学年の感想

● 防災避難訓練について

- ・ 火元となるハンコン室から避難した。訓練には緊張感をもって臨むことができたが、実際に災害が起こった場合今回のように迅速に避難できるか不安である。
- ・ 体育の授業が行われていたためグラウンドにおり、全クラスが避難してくる様子を見ることができた。ほとんどの人は真剣に取り組んでいたが、私語をしている人もいて、残念に感じた。
- ・ 消防署の方がO×クイズ等を交えながらわかりやすく説明して下さいだったので火災に関する知識や災害時にとるべき具体的な行動が頭に残った。
- ・ 東稜高校は廊下がなく開かれた構造になっているので比較的逃げやすいと感じた。また、実際はもっとお互いに声をかけあって避難するべきだと思う。

● 災害時に備えた家庭での主な取組

- ・ 熊本地震以降、様々な地震対策を行うご家庭が増加しているようです。
- ・ 災害に備えた持ち出し用リュックや袋を玄関先や枕元に置いておく。
- ・ 災害時に避難する場所や危険な場所を事前に家族で見に行った。
- ・ 家族が別々の場所で災害に遭った際、携帯電話が使えない可能性があるため、集まる場所 (祖母の家や避難所等) や可否確認の方法を決めている。
- ・ 携帯電話に家族全員がGPSアプリを入れている。
- ・ 震災の恐ろしさを風化させないようニュースやテレビ番組での特集を家族で視聴するようにしている。

防災リュックの中身(例)

- 非常食 (カップ麺・冷食・チョコレート・缶詰など)・ヘルメット・水・懐中電灯・防塵グッズ・乾電池・ラジオ・マッパ
- 等の準備・買い足しを行っているご家庭が多いようです。

特に何も話していないので自分から話題を出そうと思うようになったという意見も挙げられました。

● 災害時に高校生としてできる地域貢献

- ・ 体力・気力ともに充実している年代なので積極的にボランティア活動に取り組みたいといった意見が多数を占めていました。
- ・ 清掃活動・瓦礫の撤去・募金活動・炊き出し・配給の手伝い・水汲み・力仕事・避難所での心のケア・仮設テントの設置などのボランティア活動に取り組み。
- ・ 普段から地域の方々との交流を大切に。いざという時、不明者の把握や避難の呼びかけなどに役立てることができると思う。
- ・ SNSでの呼びかけと情報収集。正しい情報を見極めることが必要。
- ・ 高校生という立場を活かして、必ず地域の大人の指示に従う。自分勝手な判断をしない。
- ・ 防災委員での活動を活かして防災マップ作成に取り組み。(公民館などに掲示)
- ・ 東稜高校の生徒であるからこそ東稜高校でボランティア活動に取り組み。学校の構造やトイレ・プールの位置などを把握している自分たちは貴重な存在だと考える。

● 東稜高校での防災教育を通して学んだこと

- ・ 「非日常は日常が試される。」という言葉に影響を受けた意見が多く挙がりました。
- ・ 日常生活を丁寧に生きたい。当たり前のことであるが、普段から周囲に迷惑をかけるようなことをしない。
- ・ 最悪の状況を考えて行動しようと思った。地震は予測不能なため、常に警戒心をもっておきたい。
- ・ 訓練を疎かにしない。高校の訓練は中学時よりリアリティーがあるように感じる。
- ・ 熊本地震の際、東稜高校がとって活躍していたことを知った。
- ・ 防災マップの制作を通して普段通学路を通る際に危険な場所がどこか気がするようになった。
- ・ 熊本地震の恐怖を思い出した。冷静さが身についたように思う。
- ・ 間違いない防災に関する意識は高く、知識も身につけている。

1 学年の生徒の中には「中学生のとき熊本地震を体験し、高校生のボランティアの方に助けられた、高校生活になった今、一人の大人として助けられる立場から自分や周囲の人を守る立場になりたい。」という意見が挙がっており、自助・共助・公助の意識が高まっているように感じました。

みなさんは充実した防災教育を受けることができる環境にいます。今後も使命感をもちつつ、あらゆる観点から防災について考えていきたいと思います。そして、自分の命・大切な人の命を守ることでできる強さを身につけていきたいと思います。

防災クイズの答え

- Q1 X エレベーターのボタンを全部押すと罠の罠に誘われて扉が開きます。(停電時は除く)
 - Q2 B ガソリンスタンドは元々危険物を取り扱う場所なので慎重に設計されています。
 - Q3 O 災害の速報によって対応が速い。臨機応変に判断してください。
 - Q4 X 身体は圧迫されたと体内に毒害が発生し、突然重い物を取り除くことで毒害が体内を循環してしまいます。(クラッシュシンдрーム現象)
 - Q5 X 要救助者を見つけた際は119番通報をして救助を待つべきです。
- 高齢者、子どもはできるだけ列の真ん中に並びように避難して下さい。その際、先頭の人が高いものにつかまりながら縦一列で避難することが望ましいです。



2学年避難所設営訓練

平成29年12月6日(水) 発行

テント設営訓練



アルファ米炊き出し訓練



簡易ベッド作成訓練



屋内に避難できず、雨よけや日よけ、けが人などに対応をするためにテントが必要となります。高校生の若い力を合わせれば、テントはすぐに立てることができます。代表生徒10名で、2分ほどで立てることができました。

アルファ米についての知識と作り方を学びました。50人分のアルファ米セットには具材・箸・容器・しゃもじなどが入っていました。具材とお米をよく混ぜて、8リットルのお湯を入れれば15分ほどで完成です。「とてもおいしい」という感想でした。

身近にある段ボールとガムテープだけで、簡易ベッドを作りました。数人で協力すれば、5分程度で完成です。寝心地もよく、災害時には、高齢者やけが人・妊婦さんなどのために作ってあげたいという感想を書いた人が、多数いました。工夫をすれば仕切りにもなります。

地域の方・講師の方からの挨拶

◎熊本市東区長 田端高志 様

「東稜生が、このような訓練を受けているのを見て、とても心強く思いました。区長としても、君たちを頼りにしています。」

◎山ノ内校区自治協議会会長 石黒義也 様

「災害時には、東稜高校がこの地域の中核的な避難所になります。日頃からの、地域とのつながりを大切にしていましょ。」

◎東区役所 漆野和也 様 (今回の訓練のメイン講師として指導していただいた消防士の方)

「自分の命を守るはもちろん、大事な人・大切な人・愛する人を守る気持ちを持って、日頃から備え、そして行動してください。」

アンケート結果

①防災について、家庭ではどのようなことを準備していますか？

1位: 避難場所(集合場所)を決めている	119人	6位: あまりしていない	29人
2位: 非常食を準備している	115人	7位: 家具転倒防止	26人
3位: 水を準備している	76人	8位: 避難経路の確認	12人
4位: 防災リュックを準備している	60人	9位: 荷物を高い所に置かない	10人
5位: 懐中電灯を複数準備している	35人	10位: 大事な物をまとめている	7人

防災意識が高い家庭が多いようです。あまり備えをしていないと言う人も、今回の訓練を受けて、準備しようと思ったと答えています。

②高校生として、災害時にどのような形で地域に貢献できると思いますか？

1位: ボランティア活動	97人	6位: 避難誘導	29人
2位: 力仕事・支援物資の運搬・配給	93人	6位: 簡易ベッド作成	29人
3位: 高齢者・身障者のサポート	73人	6位: 会話・声かけ	29人
4位: 食事準備・炊き出し	50人	9位: テント設営	28人
5位: 子供たちのお世話・遊び相手	34人	10位: 今日学習したことを活かしたい	19人

「高校生としての若い力を活かして力仕事をしたい」という回答や、「高齢者・身障者・子供たちのサポート・会話・声かけ」といった、人と関わることで貢献したいという回答が目立ちました。今回の訓練で学習したことを活かしたい・食事準備・簡易ベッド作成・テント設営という回答は合計126人であり、今回の訓練を実施した意義は、とても大きかったようです。

③これまでに東稜高校で行ってきた防災教育で学んだこと、考えたことを書いてください。

1位: 避難方法(押さない、慌てない、しゃべらない、避難経路の確認)	92人
2位: 備えの大切さ	70人
3位: 高校生は助けられる側から、助ける側にならなければいけないということ	50人
4位: 防災対策についての正しい知識	24人
5位: 災害時や備えるときの協力する姿勢・コミュニケーションの大切さ	23人
6位: 防災意識の向上	22人
7位: 命の守り方(自分の命は、自分で守る)	16人
7位: 自分のことだけでなく、周囲の人のことを考えて行動することの大切さ	16人
9位: 地域とのつながり・地域貢献の大切さ	15人
10位: 高校生は自分から主体的に行動するべきだということ	14人

生徒の感想で多数みられた言葉

「高校生は助けられる側ではなく、助ける側の存在にならなければいけない」

「憂いがあるから、備えが必要」「非日常では、日常が試される」

「今回の訓練をしたことを活かして、非常時に人の役に立てる人間になりたい」

「学ぶことが備えになり、いざという時に役に立つので、今後も防災について学び続けたい」

まとめ

今年度、君たちは様々な防災教育を受けてきました。知識を得るだけでなく、今回のような訓練で実践的な力も身に付け、防災意識を高めてきました。そして、その知識や実践力を活かすための心も育ってきたと思います。常時はもちろん、非常時こそ、国家社会に貢献できる有為な形成者と成るために、心身を鍛え、節度を重んじ、知能を磨き、徳性を涵養し、将来に備えてください。(文責:2学年主任)

防災通信 自興(3学年通信)

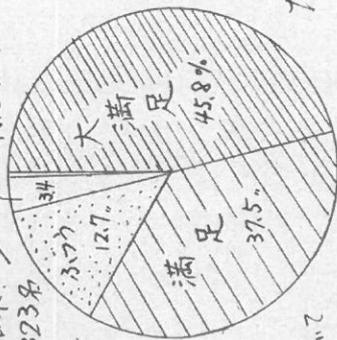
H.29.12.6(水)

防災訓練終わる!

今年度から本校では「防災教育」を本格的に取り入れることになった。例年と違い、避難訓練と消火器の実地訓練に加えて、学年別に避難所の設営や、簡易ベッドの製作、非常食の試食、提供の仕方などに取り組んだ。3年生は、避難所での避難者の受け入れ体制についての実地訓練を、HUG(避難所運営チーム)という形式で行った。予め事前指導を受け、各クラスの防災委員を

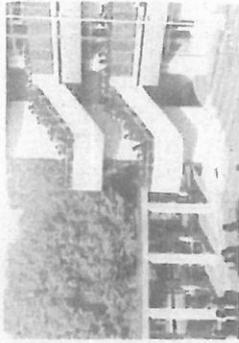
アンケート集約結果 / 回答数 323名

今回の防災研修に



今回の講演を聞いて

① 防災意識が	大いに高まった	63.8%	高まった	29.1%	6.8%
② 防災と日常生活には密接な関係が	大いに高まった	64.1%	ある	29.7%	5.9%
③ 防災に関する知識が増えた	大いに増えた	54.2%	増えた	35.0%	10.5%
④ 災害を自分のこととして考えることが	大いに出来た	63.2%	出来た	30.6%	5.0%
⑤ 防災教育の必要性を感じた	大いに感じた	67.5%	感じた	25.4%	5.0%
⑥ 今回の研修は有意義だった	大いに有意義だった	56.0%	有意義だった	30.7%	10.2%



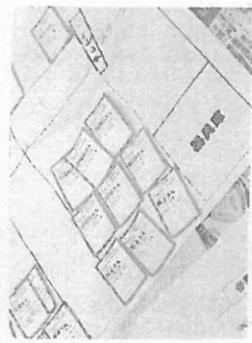
(階段を下り クラウドへ行く)



(防災士阪本氏の説明を受ける)



(広用紙に配て置画を設ける)



(避難者着カードに見たてて配置を考える)

ものの、次第に要領を得て、スムーズな動きを見せた。最後の講評の中で、

防災士の阪本氏の「備え有れば憂いなし」の言葉に納得した。

参加者の声より

今回の研修を通して、私は、改めて、自然災害に、対処して、備えを、この大工で、感じました。今回初めて取り組んだHUGというゲームは、避難所での適切な対応のしかたを、シミュレーションを通して、身につけていく、大変な、勉強になりました。いろいろなことを、経験することが、本当に、嬉しかったです。また、この中で、多くの、仲間と、協力して、災害に、対処することが、とても、楽しかったです。また、この中で、多くの、仲間と、協力して、災害に、対処することが、とても、楽しかったです。

今日は、防災士としての、防災教育でした。私は、HUGというゲームと、同じことを、行ったので、その、経験が、とても、役に立ちました。自分たちで、避難所を、設営して、行ったので、その、経験が、とても、役に立ちました。また、自分たち自身を、避難所が、おこなってきた、経験が、とても、役に立ちました。また、自分たち自身を、避難所が、おこなってきた、経験が、とても、役に立ちました。また、自分たち自身を、避難所が、おこなってきた、経験が、とても、役に立ちました。

今回の研修で、実際災害が起きた時、自分とは、どの様に、行動するか、という、課題が、多く、あったので、とても、役に立ちました。特に、印象的なのは、避難所の設営や、運営を、HUGで、みんな、考えて、やったことです。また、みんな、協力して、災害に、対処することが、とても、楽しかったです。また、自分たち自身を、避難所が、おこなってきた、経験が、とても、役に立ちました。

中心に取り組んだ。初めは、ぎこちない動きだったが、最後の講評の中で、



自興

東稜高校生徒防災委員会

生きていることへの感謝を改めて思う

神戸「人と防災未来センター」を訪問して
生徒防災委員長 山本 汐莉

2017年9月16日兵庫県神戸市「人と防災未来センター」に行ってきました。とても立派なガラス張りの建物で、学校や海外などから団体で見学に来たりしていました。

「人と防災未来センター」は、1995年1月17日午前5時46分に起こった阪神・淡路大震災というマグニチュード7.3の地震の経験と教訓を継承し、防災・減災の実現のために必要な情報を発信する施設です。

最初に、震災体験フロアの1.17シアターで「5:46の衝撃」という映像を見ました。家や道路、田んぼやビルが崩壊するすさまじさを7分間の映像と音響で体験することができました。また、ジオラマ模型で震災直後の街がリアルに再現されており、震災直後の街を実際に歩いているようでとても複雑な気持ちでした。

大震災ホールでは、ある女性の実体験がドラマになっていて、タンスに挟まれた家族を亡くし、それでもボランティアの方々に励まされ頑張っているというドラマでした。このドラマを見た後には本当に「生きてよかった」と感じました。

震災の記録フロアでは、震災後の写真や語り部の映像、記念に残された物が実体験とともに展示されていました。木造の家の形は残っておらずペしゃんこになっていて、道路が瓦礫で車が通ることのできないようになっていたり、コンクリート造りの家やビルも柱が崩れたり、1つの階が潰れてビルが下がったりしていました。さらに、震災後すぐ起こった火災はとても大きな範囲で起こり、生活用品や家族との思い出の物が取り出せなかったと考えると胸が痛くなりました。復興の展示では、笑顔の写真も増えて、お互いに支えあいの手紙も交換もあったり希望が見え始めていたのが伝わってきました。

案内人の方は、とても親切で私たちに地震について話して下さったり、資料をいただいたり、研修に来たことを伝えると別の資料館にも案内していただきました。東北でも感じたことですが、おもてなしがすごくあり、また行きたいなと思います。また、防災・減災フロアもあり、地震のシミュレーションをして、家具のすべり止めやストッパーをする必要性を改めて感じました。

人と防災未来センターでは、阪神・淡路大震災の被害や悲惨さについて知ることができ、防災の大切さを学び身につけることができました。大人600円、高校生無料、毎月17日は無料となっているのでぜひ行って自分の目で見て体験してください。





津波てんでんこ 防災教育 (IV) を終えて

1月23日(火)13:00から学習室3において、葛藤事例を用いた思考実験討論型の防災教育を行いました。授業で用いた葛藤事例は、「大津波警報が発令され、避難の途中で避難放棄者を発見したときにどうするか」というものでした。

様々な意見が出て、大いに議論が盛り上がりました。議論の中で自分の意見を変える人も出てきました。

皆さん方も大いに対話を楽しんでください。以下に、参加者の感想からいくつかを紹介します。

【感想①】自分の考えもしない意見が出たが、



とても納得することが多くあった。自分の意見を持つことも大切であるが、相手の意見を聞きお互いが納得し、尊重していかなければいけない。クラスの人たちや先生方にもこの話し合いをしてもらいたいと思った。討論形式だったので、内容が頭によく入ってきた。討論を授業で増やしてもらいたい。選択した理由を論理的に述べて相手に考えが伝わるようにしたい。

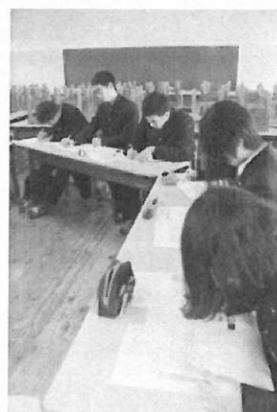
【感想②】価値観が全く同じ人はいないんだなと思った。だから100%みんなが納得できる答えもないと思った。自分と異なる意見が出たとき同意できる場面がいくつもあった。

また意見を衝突させて出てきた意見がしっくりくる気がした。人として成長できた気がした。大学ではもっと議論する機会があると思うので、自分の意見を発信し、他人の意見を取り込んでいきたい。今回の防災教育をとおしていろいろと学ぶことが出来ました。ありがとうございました。



【感想③】様々な意見が出て、視野が広がり、理解が深まった。普段起こらない事が起こってしまったときに、人間は正しい判断が出来るのか、良心は本当に働くのか不安に思った。津波てんでんこに反対する人も多かったが、実際の状況ではどうなのだろうと思った。前もって決めておくことが大切であると思った。

【感想④】意見が次々に言える人をすごいと思った。自分には意見はあってもそれを言葉にして言うことが出来ないし、違ったらどうしようと思ってしまう。先生がおっしゃったように震災は平等に降りかかってくるので、一人一人の意見が大切であると思った。意見を口に出して言うのは必要だと思った。参加できて良かった。



津波てんでんこ

津波の被害に何度もあってきた三陸地方の言い伝え。「てんでんこ」は「てんでばらばらに」の方言で、津波の時は家族さえ構わずに、1人でも高台に走って逃げろという意味。家族や集落の全滅を防ぐために語り継がれてきた。

<https://kotobank.jp/word> より

自興



平成30年2月2日(金)
国立オリンピック青少年総合センター
平成29年度 防災教育を中心とした
実践的安全教育総合支援事業
全国成果報告会より

■文部科学省 初等中等教育局 健康教育食育課 戸田課長

防災教育・安全教育は、学習指導要領総則で各教科等を通じて行う事になっており、学校安全計画と関連づけながら各教科でも取り組んでほしい。また学校や教育委員会だけに留まることなく、地域や関係機関とも連携を取りながら進めてほしい。防災は一校だけで行っても効果が薄いし、安全も一校だけでは確保出来ない。情報発信を進めて、横展開をお願いしたい。

■東京女子体育大学 戸田教授

那須雪崩事故の調査委員として事件の検証に関わったが、過去の教訓が活かされていない側面がある。北広島市で小学校女児がスキー実習中にスノーボーダーと衝突して死亡した事故が直近で起きている。その検証にも関わった。このケースの場合、誰も見ていないところで衝突事故が発生しており、校長に求められても事故をどう説明して良いかわからなかったが、それをマスコミは隠蔽と糾弾した。

事件・事故は、いつでも、どこでも、誰にでも人の心の隙を突いて起きてくる。那須雪崩事故の場合、主催者も、引率者も、指導者もいたのだが、肝心の主体者がいなかった。調べると誰も主体者の意識がない。他人任せ。誰も危機意識がなかった。第一自然相手に絶対安全などあり得ない。雪崩事故は特殊なケースでなく、バスケットやサッカーなどの部活動中の時に起こる事故と根っこは同じである。危機意識の無さ緊張感の無さ、ここを事件、事故は突いてくる。

一人の子どもに四六時中ついて身を守ってやることは出来ない。取り巻く大人が積極的に主体性を持って関わることが大切である。「例年やっている」「うちは関係ない」という正常化のバイアスやマンネリ化が怖い。池田小事件でもその前に京都で同じような事故が起きており、通知も(当時文科省に在籍)出していた。過去の事例に学ばなかった。特に安全点検、避難訓練は、マンネリ化や正常化のバイアスが働きやすい。危機管理の視点でもう一度教育活動を見直すこと。特に担当者は、この意識を強く持ち、管理責任者に伝えること。また伝統を重ねてきた行事ほど慣れが働き危ない。連携体制の未整備や機器の不備、事前研修の不備などがある場合が多い。

那須雪崩事故の場合、指導した先生と校長への攻撃があった。検証委員会では、自然災害か人災か科学的には判断がつかないとしたが、遺族からは人災だと言われた。事故発生後の取組も大切だが、事故発生を未然に防ぐ取組はさらに大切であり、リスクマネジメントの視点で計画を見直すべきだった。教師の個人義務に矮小化すべきではない。組織義務として主体者を中心に行うこと。

組織運営のマンネリズムがヒューマンエラーに繋がる。組織間で信頼関係という名の丸投げがあった。情報共有がなかった。信頼することは関わらないことではない。また役割分担で終わりではなく、分担後の関わりが大切。

事故が起きるとみんな大変。みんな不幸になる。事故の影響は長々と続く。事故が起きるとそれまで友好的だった人が、批判的になる。絶対安全はない。受け入れ不可能なリスクがないことが安全(国際規格ISO/IECガイド)と言われている。事前の取組と直後のケアが重要である。



自興

東稜高校生徒防災委員会

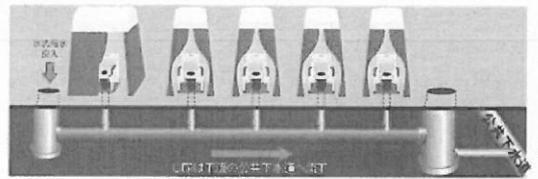
備災 災害時のトイレについて考える

■熊本市の取組(熊本市 HPより)

熊本市では、「熊本市上下水道事業経営基本計画」に位置付けられている基本施策「災害に強い上下水道の確立」を実現する方策の一つとして策定した「マンホールトイレ整備計画」(平成24年度策定)に基づき、熊本市地域防災計画に避難所として位置付けられている中学校(下水道計画区域内の38校)を対象として、マンホールトイレの整備を行っています。



熊本地震発災直後は、市内全域で断水し、開設された多くの避難所でトイレ用水の供給が断られました。そうした状況を受け、本震発災後には、上下水道局職員により熊本地震発生時までには整備された避難所である中学校4



<設置方針>

- (1) マンホールトイレの設置数は、1校あたり5基とし、そのうち1基は準いす用とする。
- (2) 避難者が利用しやすい場所に設置する。
- (3) 排泄用の水が確保しやすく、利用しやすいところに設置する(プール水、河川水、雨水等)など
- (4) 可能な限り、照明用の電源が確保できる場所に設置する。

校にマンホールトイレ(全20基)を設置しました。マンホールトイレ設置後は、トイレ用水としてプール水等を利用するため、ボランティアの方々や学校関係者の皆様にご協力をいただきました。

災害時のトイレ事情



下の円グラフは、東日本大震災時に仮設トイレが避難所に行き渡るまでの日数を表したものです。熊本市でも、災害に備えて、対策が進め

られています。

しかし発災時にトイレがすぐに来るとは限りません。かなりの時間を要することがわかります。いざという備えのために、緊急トイレの作り方を知っておくと良いと思います。(右:日本トイレ研究所より) また和式の仮設トイレを洋式のトイレに変えることも上の写真の通り、工夫次第で可能です。

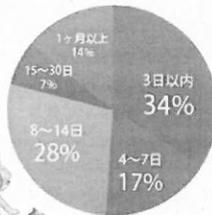


図:仮設トイレが行き渡るのに要した日数(調査:名古屋大学エコトピア科学研究所、協力:日本トイレ研究所)

(日本トイレ研究所HP)

緊急用トイレの作り方

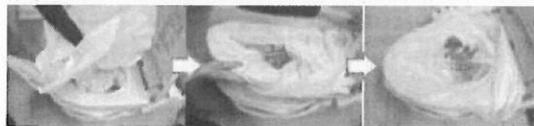
- 【準備するもの】新聞紙(見聞き2~3枚)、ビニール袋2枚
(汚れ防止の観点から容量45L程度で、便座を覆える大きさであることが望ましい)

①まず、ビニール袋を便器に置く

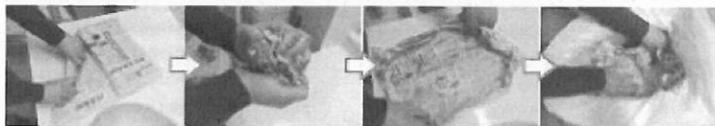


※ 便器内や水漏まり(水封)に、②の鋪きのビニール袋が直接接触しないようにするため

②ごみ袋を便器にかぶせる(便座を覆うようにして裏側に折り返す)



③四つ折りの新聞紙をクシャクシャにした後、広げて四隅を折り上げ、ビニールの底に置く



④2枚目の新聞紙も同様にクシャクシャにした後、縦横の向きを変えてから底に置く



⑤新聞紙を短冊状に数回切りさき、クシャクシャにして、ビニール袋の中に入れ完成



⑥ビニール袋の中に用を足した後は空気を抜いて袋を縛る。ごみ回収があるまで衛生的に保管

© 2013 Japan Toilet Labo.



白興

東稜高校生徒防災委員会

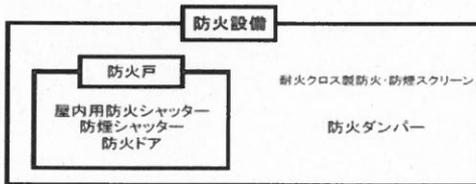
備災 防火扉について知る

■学校には、防火扉があります。今回は防火扉について、紹介します。

防火扉は、延焼を食い止めるためのもので、火災時に防火区画毎に、密閉空間を作ります。火は酸素がないと燃えないため、密閉された区画では延焼を防ぐ効果があり、消火活動の時間と建物から避難するまでの時間を作り出してくれるものです。

防火戸は、形状によって、扉タイプ、シャッタータイプ、シャッターとくぐり戸の組合わせたタイプに分類されます。

また普段は閉まっていて通行時のみ開ける閉鎖方式と普段は開いていて、火災時に発生する煙や熱を感知してから閉まる随時閉鎖式に分類されます。



【日本シャッター・ドア協会HPより】

■潜り戸とは背の低く幅のせまい小さな戸のことで、かかんでくぐるようにして入ることから、この名がついています。防火戸は、一度閉められると通行することができなくなるので、シャッターの一部に潜り戸を設けて、通ることが出来るようになっています。

■右の記事からもわかるように、障害物で防火戸が機能しないことがないように、防火戸の周りにはものを置かないようにすることを気をつけなければなりません。これと同じように、緊急避難時に倒れたもので避難経路がふさがれて通れないということがないように日頃から注意が必要です。

アスクル火災

障害物で防火扉閉まらず ドア施錠で消防進めず

産経新聞 2017.3.15

総務省消防庁と国交省が明らかに埼玉県三芳町の事務用品通販アスクルの物流倉庫火災で、一部の防火シャッターが正常に作動しなかったほか、ドアの一部が施錠され、消防隊の進入を阻んでいたことが14日、分かった。延焼の拡大につながった可能性がある。総務省消防庁と国土交通省が設けた大規模倉庫の防火対策検討会で、両省庁や地元消防が明らかにした。



検討会によると、アスクルの3階建て倉庫内には、火災時に自動的に床まで下りて火の回りを防ぐ防火シャッターが一定間隔で設置されていた。だが2月の火災では一部のシャッターが全く下りていなかったほか、障害物のため閉まりきらないシャッターがあった。

地元消防は、火災発生後に建物内の階段から倉庫3階に入ろうとしたが、鉄製ドアが施錠され、先に進めなかったと説明した。倉庫2階は煙が濃く荷物が多いなどの理由で、既に進入で



きない状況だったという。

アスクル倉庫の火災は2月16日発生。消火が難航し鎮火まで12日かかった。

自興



阿蘇火山博物館は、1982年に設立され、2004年以降は財団法人、2013年からは公益財団法人として運営しています。従来から阿蘇火山に関する調査研究や教育普及活動を入れてきました。しかし、2016年の熊本地震によって阿蘇地域とともに博物館も被害を受けました。その後、1年以上にわたって復旧工事を進め、2017年10月1日からは全面オープンしました。

その一方で、2016年から阿蘇ユネスコジオパークの事務局も担っており、阿蘇全体の教育や観光にも大きく寄与しています。



阿蘇火山博物館
館長 池辺伸一郎
(いけべ しんいちろう)

阿蘇火山博物館ではインターナリターによるガイドが行われている。ここで活動している阿蘇ガイド養成講座が阿蘇ガイド養成講座を修了し、認定を受けている。



ると磁力が小さくなるので、岩石の磁場の強さの変化を測れば温度が変化したことがわかります。

マグマや火山ガスが地下の岩石の隙間をたどって上昇するときには、途中で岩盤が割れたり、周辺が揺らされて地震や火山性微動が発生します。それらは火山周辺に地震計を置いて観測しています。

またマグマが上昇するときには山全体を持ち上げることがあります。GPSを熊まは山形膨らんだり傾いたりするわずかな変化でも捉えられます。変化の現象はさまざまなのです

が、噴火につながる現象なのか、そうではないのかを、観測データから総合的に判断します。

しかし火山によってマグマのタイプも地下構造も異なるので一筋縄ではいきません。それぞれの火山の性格を十分に知ることがとても重要です。阿蘇では博物館が火口カメラを設置して、火口の活動をリアルタイムで観測しています。

カメラからの映像は、気象庁や大学と連携してほかの観測データとともに分析することで、防災対策にも大きな役割を果たします。

ただし、現在は昨年までの噴火活動や地震でシステムが稼働していません。2018年夏頃までには復旧の予定です。

Q. 火山の近くでの注意点は？

A. 火山近くに住む観光する、火山に警戒などの状況に応じて対応が異なります。

火山の近くに住むだけでなく火山に登る人も、山の性格を知っておくことが大切です。噴火警戒レベルなどの活動状況を気象庁のウェブサイトなどで調べておくことも忘れないでください。噴火警戒レベルが2以上の場合は、地元の行政などが発信する火山防災情報に従って行動するようにしましょう。

そして火山周辺の地域では火山ガスにも注意が必要です。噴火しなく

Q. 火山噴火で何が起きるの？

A. 火砕流が起きたり火山灰が降りたりします。

火山が噴火すると地下のマグマがさまざまな物質に姿を変えて火口の外に飛び出します。

マグマがそのまま流れ出たものが溶岩。細かく砕かれた粒状の固体が火山灰です。粒が大きいのは火山れきや火山岩塊です。また、マグマから分離した気体は火山ガスです。火砕流はこれらの物質が混ざり合つて一気に流れ出す現象です。

火砕流によって大量のマグマが噴出し、マグマだまりが空洞になると、地表部分が陥没して大きなカルデラをつくる場合があります。田形のはみの直径が約2キロメートル以上のものをカルデラといいますが阿蘇カルデラは約20キロメートルもあります。世界的にも大規模なカルデラで、約9万年前の大噴火でできました。このときの火砕流は山奥まで、火山灰は北海道にまで達しました。

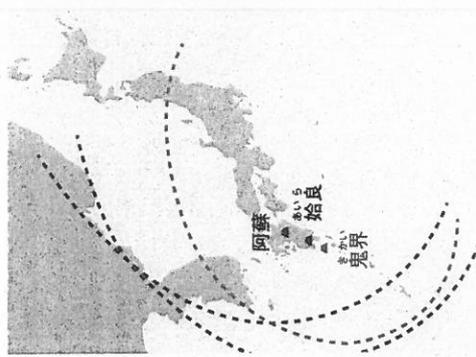
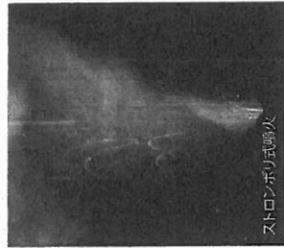
阿蘇カルデラの中には新しく生まれた小火山群があり、そのうち現在も活発に活動を繰り返しているのが中岳です。地下のマグマは比較的粘り気のない玄武岩で、噴火が始まると火山灰を長期間噴出するのが特徴です。マグマが火口の底に近づくとマグマのしぶきを噴き上げるストロンボリ式噴火と呼ばれる噴火に移行します。

Q. 噴火は予測できるの？

A. 地表や地下で起こっている変化を捉えることが予測につながります。

火山が噴火するときのさまざまな変化を捉えることができれば、より正確に予測できるようになります。

噴火が近づくと約1000℃のマグマが地表に上昇してくるので、火道(マグマの通り道)やその周辺の温度が上がります。岩石は温度が上が

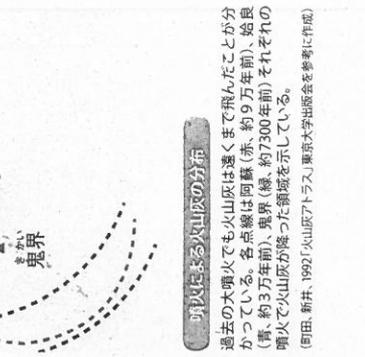
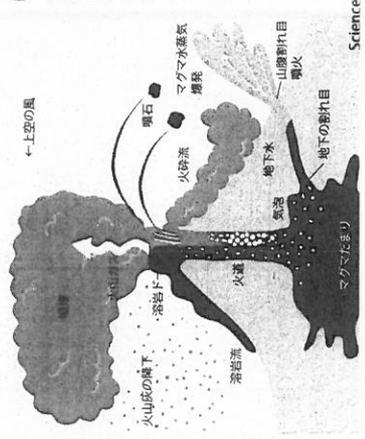


阿蘇に広がる火山灰の分布

過去の大噴火でも火山灰は遠くまで飛んだことが分かっています。赤点線は阿蘇(赤、約9万年前)、始良(黄、約3万年前)、鬼界(緑、約7300年前)それぞれの噴火で火山灰が降った領域を示している。(何田、新井、1992「火山灰アトラス」東京大学出版会を参考に作成)

火山の噴火には溶岩が流出する非爆発的な活動と、噴霧を上げて火山灰を降らせたり、噴石が海に飛ぶような爆発的な活動にかがある。

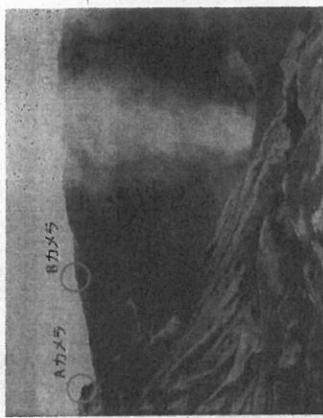
(藤井、1993を参考に一部加筆)



2014年秋頃から活発化した阿蘇中岳。朝昼と共に火山灰が風の吹く方向に飛んでいく様子が見られる。

ても、火山ガスは常に出ています。ガスの成分は90%以上が水蒸気ですが、二酸化硫黄や硫化水素などの有毒ガスが微量含まれています。温泉地の硫黄の臭いはこの硫化水素なのです。これらは空気より重いので風がないと地形的に低い場所にたまっていくこともよくあります。硫黄の臭いがしたら、谷のような低い所やくぼ地には近づかないようにしましょう。

火山は噴火を繰り返すことで美しい景観や温泉を作り、噴出物による過作用などによっておいしい水を生み出しています。私たちは火山から多くの恵みを受けているのですが、噴火という厳しい一面もあることを理解しておきましょう。地球上に住む私たちは火山と共存する意識を持つておきたいですね。



写真上/中岳の火口を望むように2カ所に火口カメラが設置されている。
写真左/2014年12月15日にAカメラが捉えた噴火の様子。

気象庁ホームページ
サイト内では日本における各火山の観測データ、監視カメラ画像、火山ガス放出量のデータなどを公開している。
URL: <http://www.jma.go.jp/jma/index.html>



白興

東稜高校生徒防災委員会

あれから7年の月日が流れました。今回は宮城県気仙沼市立階上中学校で当時10日遅れで行われた卒業式で読み上げられた答辞を紹介します。

伝説の答辞

今日は未曾有の大震災の傷も癒えないさなか私たちのために卒業式を挙げて頂き有難うございます。ちょうど10日前の3月12日、春を思わせる暖かな日でした。私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を希望に胸を膨らませ、通いなれたこの学舎を57名揃って巣立つはずでした。前日の11日一足早く渡された思い出の詰まったアルバムを開き、10数時間後の卒業式に思いをはせた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こるとも知らず……。

階上中学といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし自然の猛威の前には人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切な物を容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というにはむご過ぎるものでした。辛くて、悔しくてたまりません。

時計の針は14時46分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされた者として顔を上げ常に思いやりの心を持ち強く正しくたくましく生きて行かなければなりません。命の重さを知るには大き過ぎる代償でした。しかし苦境にあっても天を恨まず運命に耐え助け合って生きていくことがこれからの私たちの使命です。

私たちは今それぞれの新しい人生の一步を踏み出します。どこにいても何をしようともこの地で仲間と共有した時を忘れず宝物として生きていきます。

後輩の皆さん階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が如何に貴重なものかを考えいとおしんで過ごしてください。

先生方、親身のご指導有難うございました。先生方が如何に私たちを思って下さっていたか、今になって良く分かります。

地域の皆さん、これまで様々なご支援を頂き有難うございました。これからも宜しく願いいたします。

お父さんお母さん家族の皆さんこれから私たちが歩いていく姿を見守っててください。必ず良き社会人になります。

私はこの階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。

最後に本当に本当に有難うございました。

平成23年3月22日 第64回卒業生代表 梶原裕太

平成22年度『文部科学白書』より



東稜高校生徒防災委員会

東稜高校が地域の守りとなれ

9700→2000→400の数字が意味すること

東稜高校では、今年度、文部科学省と熊本県から研究指定を受けて、防災教育に取り組んできました。その取組の中心テーマの一つが、「地域防災力を高めるために東稜高校が果たす役割」でした。そのために、学校運営協議会を設立し、東稜高校のある山ノ内校区の自治協議会や防災担当の東区役所、警察や消防、医療関係者、山ノ内小学校の校長先生、防災士など様々な方々にご協力をいただき会議を重ねてきました。

また校内では、生徒防災委員会を立ち上げ組織としての防災力を、また防災教育（Ⅰ）～（Ⅳ）をとおして生徒一人一人の防災力を高める事に挑戦してきました。

山ノ内校区の人口は約9,700人で、その内65歳以上の高齢者は約2,000人、その内介護を必要とする方が400人です。昼間は、いわゆる現役世代の多くが、校区外に働きに出ており、もしも昼間に発災した場合、職員も含めて約1,100人の東稜高校は、貴重なマンパワーであり、地域から貢献が期待されているのです。

「高校生は守られる存在でなく、守る存在である。」この言葉の意味がわかってもらえたいと思います。

「守る」ためには、まず「自分の身は自分で守ること（自助）」、次に「自分たちの身は自分たちで守ること（共助）」が大切です。

すから1年生は自助、2、3年生は共助をテーマに防災教育を進めました。公助は、皆さんの将来に期待しています。

防災教育は、命の教育です。理想論やきれい事は通用しません。否応なしに、命や現実と向き合う事になります。その中で、人の限界を知り、人と人との繋がりが人の命も心も救うことを学びます。そして、非日常を生き抜くために、日常を丁寧に一生懸命に生きなければならないという結論に至ります。

防災教育を通じて、皆さんが、誠実に人と向き合い、自分と向き合い、自己を高めて、東稜高校を高めてくれる事を期待します。

（防災主任 竹中）

